
神田先生

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神田先生

【Nコード】

N0982C

【作者名】

KMY

【あらすじ】

一ノ谷中学校1年は組担任・神田進は魔法使い？神田先生とユカイな31人の生徒達の学園コメディーと、謎の組織「ヤモリ」との対決からなる、学園ファンタジー！ファンタジー駄作ばかり書いてきたKMYの、世紀の大駄作第3弾！

第01話 さよなら神田先生（前書き）

えー、この小説には所々に濁点の間違いがありますが、そこそこはご容赦ください。吐き気がしても慰謝料とかそういうったお問い合わせには一切お答えしません。その事を承知の上で読んでください。また、もしよければ、濁点の間違いをメールしていただければすぐ直します。

この小説は、基本的に一話完結方式でした。（爆）1日がものすごく長いです。たまに「え？小説の中の今日って、もしかして先月から続いてる！？」と思ってしまうような冗長さもあると思います。が、そこそこは我慢してくださいー^^；

この小説は、登場人物が非常に多く、いわゆる「空気キャラ」も多いですが、空気キャラは空気キャラとして忘れてください。

この小説は、新生「神田先生」です。旧「神田先生」の内容を修正加筆したものです。旧「神田先生」は、この小説の入口にあるリンクから参照できます。新「神田先生」では、「1. 性的描写を大幅に減らす」「2. 難読漢字の使用を避ける」「3. ライトノベルの文法にのっとる」この3つを基本としています。今回は女性読者もターゲットにしているつもりです。

一部時事問題について取りあげている部分がありますが、僕とあなたとは見解が違い、それゆえにあなたに不愉快な思いをさせるかもしれません。でも、僕の出来事に対する見解はこうなんだ、と理解いただければ嬉しいです。また、初期では、魔法先生ネギま！を中心にした、週刊少年マガジン連載の漫画のいじりも多々ありますが、小ネタとして受け流していただければありがたいです。

第2話から第6話まではさよなら絶望先生に酷似した話の進行となっています。この小説は、もともとさよなら絶望先生の二次製作のつもりでしたが、第7話からどんどん話がそれていっています。第2〜6話が話の本筋なのに、いつのまにか第7話以降が本筋にな

っている始末。

第01話 さよなら神田先生

桜の花びらの散りゆく2003年4月7日月曜日。一ノ谷中学校校門前。

その少年は、学校の門を眺めていた。

「この学校が、今から僕の勤める…」

その声は、いかにも少年しみていた。白いカッターシャツの上に茶色のスーツを着て赤いネクタイをしているその少年は、まばらに歩いている生徒たちの合間をくぐって、学校の運動場に入った。

「制服を着てください？」

いきなり後ろから声をかけられ、その少年はびくっとして後ろを見る。

「あ、あなたは？」

少年に声をかけたのは、背中の上部あたりまで届く髪の毛を真ん中できれいに分けた、一人の少女であった。論外だが、制服を着ている。

「あなた、あたしと同じ身長…、今年から中学1年生？それにしちゃ、あまり見かけない顔ですね？」

セーラー服を着ているその少女は、少年に声をかける。

「いえ、」

少年は、返事をする。

「あたしは羽生かおる。あなたは？」

いきなり少女に名乗られ、少年は困惑した。いや、この名前はどつかで聞いたような気がするのだ。

「あっ！」

少年は思い出した。自分の名簿に載っている生徒の名前であった。

「に、入学おめでとうございます」

少年は、羽生に話しかける。

「は？あなたもじゃないの。」

羽生は、少年に言う。

「名乗りなさい。」

そう言われ、少年は答える。

「ええと、かんだすむ神田進といいます。」

「神田？合格。」

羽生のセリフに奇妙な単語がついているものだから、神田は問う。

「何が合格なのですか？」

「一般的な名前はオッケーです。」

「はい？」

神田は疑問を残しながらも、右手首につけていた腕時計を見た。

7時。7時集合だったのでぎりぎりの時間である。

「では失礼します！」

神田は焦った顔でそう言い、走って南校舎へ向かって行った。

「何でそんなに急ぐの？始業式は9時からのはずじゃ・・・。」

羽生は後ろから声をかけるが、神田の反応する気配はなかった。

それだけではない。中校舎の真ん中にある児童玄関ではなく南校舎の端っこにある職員玄関に走って行っているのだ。

「児童玄関はあっちよ！あと、制服！」

羽生は思いつきり大きな声で神田に怒鳴るが、言い終わる頃には神田はもうすでに職員玄関に消えていた。

「んったく、もう・・・。」

羽生はそうつぶやき、中校舎の児童玄関に向かって行った。

入学式を兼ねた始業式。

校長先生の式辞が終わり、次いで職員紹介になった。

「では、まず1年い組には、去年3年ろ組を担当した岡田先生が就きます」

校長先生が、体育館の舞台の真ん中に立ち、手に持っているプリントから名前を読みあげる。

「次に、1年ろ組には、去年2年に組を担当した五十嵐先生が就き

ます」

校長先生は着々とプリントの視線を移してゆく。

「次に、1年は組には、新入りの新しい先生、神田先生が就きます」
その名を聞き、小学生のときに学級の委員長をしていた羽生は眼を丸くした。思わず体育座りをしているその腰が持ち上がりそうになった。

「次に、1年に組には、水上中学校から転任された西川先生が…」
校長先生が先ほど読み上げた意味不明な文章の内容が、羽生の頭をくるくる回っていた。まさかあの少年が先生？春の野原先生なら漫画の中だからなんとか我慢できたのだが、兄の読んでいる漫画が現実に見えたことを前にして、羽生はどうすればいいのか分からなかった。

もしかして某英語教師のような魔法使い？それとも……。そんなありえぬ憶測を胸に、羽生は、整列している1年は組の他の生徒達に混じって、廊下を歩いて教室へ向かっていた。

教育基準法違反の10歳先生？それともその10歳先生の揚げ足を取ってばかりいるあの生徒のお兄さん？いろいろな憶測を胸に、羽生は不安な顔で教室に入り、机の上にゼロハンテープで張られているたくさんの名前の中から、自分の名前を探してその机の椅子に座った。

全員の生徒達が着席し、雑談が始まった。

「ねえ、」

羽生も後ろから話かけられ、びくっと後ろを振り向いた。少女が座っていた。

「わたしは朝風^{あさめう}まき。あなたの名前は？」

「羽生かおる。」

無愛想に、羽生は答えた。自分は今考えなければいけないことがある。なのに……。

「ねえ、ねえ、」

朝風とかいう輩にうるさく声をかけられ、羽生は後ろを振り向き、朝風の手をつかみ、

「耳を貸して。」

と言った。朝風が耳を羽生の口に近づけると、羽生はそっと、言っ

てやった。「あたしね、今考えていることがあるの。」

「何？」

逆効果であった。朝風はついに羽生にせがみだした。

「何？何？」

「あのねえ……。」

羽生がそう言い、拳を朝風の頭に軽くぶつけようとした瞬間。教室の引き戸が開き、少年が教室に入り、引き戸を閉めた。

「えっ……？」

教室は一瞬ざわっとなった。

「迷子？」

一人の生徒に声をかけられたその少年、神田進は、真ん中の教壇に立ち、言った。

「迷子ではありません」

そう言い、くると黒板の方を向き、白いチョークを持って黒板に字を書いた。

” 神田 進 かんだすすむ ”

それから再び生徒達の方を向き、言った。

「神田進、といいます。これから一年間、よろしくお願いします」

その一礼が終わると、羽生は手を上げる。

「あっ、今朝の羽生さん。何でしょう」

「とぼけないで。」

羽生はそう言い、立ち上がる。

「あなた、何歳なのですか？」

「15歳です」

「誕生日はいつですか？」

「9月17日です…」

神田先生が答えると、羽生さんはあっとため息をついた。

「教育基準法違反ぎりぎりってことですね？」

「まあ、そのようなものです。ただし15歳は数え年…」

「はい？」

羽生の目が一瞬、点になった。

「それって、14歳じゃないんですか？」

「はう、え、ええと、あ、あの人に指示されまして、」

慌てて弁論の言葉を探す神田先生の教壇へ、羽生はずしりずしりと一歩一歩近づいてきた。羽生は神田先生の肩をぽんと叩く。

「やっぱり失格。」

「……………」

神田先生は下をうつむいてしまった。

「まあ、いいんじゃないの」

生徒の中の誰かが、言った。その言葉に反射されるように、次々と同じようなセリフが飛び交う。

「ちょっと待ちなさいよ！」

羽生が生徒達の方に怒鳴る頃には、生徒達の目は許可を求めて羽生の顔を一齐に見ていた。

「それにかわいらしい顔じゃないの」

朝風が言った。確かに神田先生は、14歳とは思えないほどかわいらしい。

「それって、某魔法使い英語教師と同じ展開じゃないの！」

羽生が大声で反論するが、誰かが言った。

「教壇に立たせてもらってるから、校長先生も校長先生じゃないの？」

「うつ……………」

羽生は、しばらく目をつぶってから言った。

「ま、まあ、とにかく、労働基準法では15歳になった次の3月31日まで働けない事になっているんだけど、……………まあいいわ。」

羽生さんはそう言い、諦めたような顔をして席に戻った。後で校長先生に抗議しよう。その思いを胸に、席に座る。

「では、H Rを始めましょう。その前に、出席を取りたいと思います」

神田先生はそう言い、机の上の名簿を手にとって開く。

「順番に読み上げます。読みあげられた人はいと返事をしてください。いいですね、では、1番の糸色いとしき己美さん」

「はい」

糸色が立ち上がったので、神田先生は慌てて付け足しをする。

「ええと、立たなくてもいいです。はいだけでいいです。では、2番の公孫田胡桃いちろたくるみさん」

「はい」

「3番の犬神毛子いぬかみかずこさん」

「はい」

「4番の一条隆君いっしょうたかし」

「はい」

「5番の生田万君いくたよろず」

「……」

返事がない。

「欠席ですね」

神田先生はそう言い、名簿にチェックを入れると続ける。

「6番の伊口男良君いくおら」

「はい」

「7番の呂麻男咲子ろまおやかいさん」

「はい」

「8番の白黒鈍さんはるなずみどん」

「はい」

「9番の花田土竜君はなだもぐら」

「あはーん」

その花田君の姿を見て、神田先生は驚いた。

「名簿には男って書いてありますか？」

「あたし、男よ」

その容姿、頭には赤色のリボン、そして髪の毛もまとめているし、何よりも女の制服を着ているその少年しょうじょを見て、神田先生は半信半疑の顔で続けた。

「10番の長谷川玲子さんはせがわれいこ」

「はい」

「11番の羽生かおるさんはせ」

「はい」

「12番の火厘良子さんほりんらいこ」

「はい」

「あれ？パーマは禁止ですよ？」

神田先生が火厘さんに言った。火厘さんの髪の毛は、パーマをかけたようなアフロみたいなの、その区切りが言い表せないような、そのような髪型であった。

「遊んでいたらこうなったんです」

「左眼の眼帯は？」

「いろいろありました」

「……とにかく時間もないので、進めます。13番の蛭崎惇君はたるさきとん」

「はい」

「14番の八月一日聡君ほずみさとし」

「はい」

「15番の別所春君べっしよはるむらら」

「はい」

「16番の間丸出汁夫君といまるだしお」

「はい」

「17番の有葉実さんだやくみのり」

「はい」

「18番の零時治君れいじおさむ」

「はい」

「19番の謎十一男君」
なぞかずお

「はい」

「20番の卯友礎理さん」
らゆそり

「はい」

「服が汚れていますね？」

「絵の具です」

「はいはい、21番の掲門櫻さん」
おかとさくら

「はい」

「22番の大馬馬子さん」
おおばうまこ

「はい」

「23番の冲本守人君」
おきもともりと

「はい」

「24番の前後進君」
まうらすむ

「はい」

「25番の前田涉君」
まえだあゆむ

「はい」

「26番の是長読さん」
これはよ

「はい」

「本を読むのをやめてください」

「嫌です」

是さんは、本を読んでばかりで前を全く見ていない。机にはたくさん
さんの本が積まれていて、天井まであと一歩という所に届いている。

「とにかく進めますよ。27番の赤木売生子さん」
あかきあいこ

「はい」

「28番の朝風まささん」
あさゆう

「はい」

「29番の佐々木室治君」
ささきむろじ

「はい」

「30番の柳生利君」
きりゅうひとし

「はい」

「パソコンを学校に持って来ないでください。明日持ってきたら没収しますよ」

「その時は弁償してくださいね」

柳生君は、パソコンをいじってばかりで前を全く見ていない。

「進めますよ。最後の一人、31番の龍山一君^{みやびやまはじめ}」

「はい」

「ええと、龍山君、服が水浸しだけれと風邪ひきますよ?」

「保健室には行きません」

「行ってください。新しい服を持ってきてくださいね」

「着替えるだけ無駄です。最初からすぶぬれの服がいいんです」

「は、はあ…とにかく、これで全員ですね」

神田先生はそう言い、名簿を閉じて教壇に置いた。これから、この31人の担任をするのか。神田先生は、胸の鼓動を感じていた。しかしそれをぐっと抑え、言った。

「朝のHRを始めましょう」

1年は組。生徒31人。男子16人。女子15人。

第02話 帰ってきた神田先生

4月8日火曜日、入学式の次の日である。その日の1時間目のLHRで、神田先生は言った。

「では、今日から授業が始まりますね。国語の担任は僕で、数学は足座義雄先生で、理科は関口疾風先生で、社会は緒方滯先生で、英語は長羽孝先生です」

神田先生はそう言い、生徒達に問う。

「他の教科の先生も言いましょうか？」

生徒達の反応を見て、神田先生は続ける。

「音楽は西島学先生で、保健体育は東聡先生で、美術は大田磊先生で、技術家庭は田中一先生です」

「そんなこと、いっぺんに言われても分かりませんが」

羽生が手を上げて言うが、神田先生はにっこりと言いつ返す。

「少しずつ覚えていけばいいんです。無理して覚える必要は無いですよ」

神田先生は、ふうつとため息をつき、白いチョークを持って黒板へ向かう。

”1年は組 学級委員長 一人 副学級委員長 一人”

そう書き、神田先生は再び生徒達の方を向く。

「希望の人は手を挙げてください。では、まず学級委員長」

神田先生が言うと、何人かの生徒達が手を挙げる。

「じゃんけんで決めます」

神田先生がそう言うと、羽生がいきなり立ち上がり大声で言った。

「じゃんけんでは公正な競争は望めません！投票で決めてください！」

羽生が言うと、生徒達も「そうだ、そうだ」と言い始めた。

「そうですね、ええと、ではさっき手をあげた人は前に出てくださ
い」

神田先生が訂正し言う、先ほど手を挙げた希望者が教壇の前へ並んだ。

「羽生かおる、一条隆、沖本守人、佐々木室治、零時治、八月一日聡の6人ですね」

神田先生が名前を読みあげる。

「では、まず、一人ずつ抱負を言ってください。ではまず、羽生さん」

「はい。わたしはまず、みんなに言わなければいけないことがあります」

羽生はそう言い、一区切りつけて大きな声で言った。

「責任を押し付けられても自殺はしません。責任は全部こちらで適切に処理します！」

生徒達はみんな耳を塞いだ。

「はい、もう少し静かに出来ませんか？」

神田先生にあっさりそう言われ、羽生は下をうつむいた。

「では、一条君」

「はい、」

一条君が言いかけた頃。

「ちょっと待ってください！話はまだ終わっていません！」

「あ、すみません、羽生さん、続きをどうぞ」

神田先生が促すと、羽生はさらに言った。

「桜も舞い散っていきますね」

「前置きは結構です」

神田先生が言うが、羽生は続ける。

「でも、舞い散る桜だけでは、物足りないと思いませんか？このクラスでは、生徒達がみんな会ったばかりで連携力が不足しています。こんなことでは3年生に対抗できません」

「いや、だから、あの、普通3年生は強く……」

「先生は黙ってください。という事で、何か物足りないなあと思った皆様、私に票を入れてください！」

生徒達は拍手した。というか呆れていた。拍手しないとさらに続くようなものが生徒達の心を狩り立てていた。次いて、一条隆の番になった。神田先生は一条君の背中を軽くたたいた。

「は、はい。ええと、そもそも学級委員長は、生徒達の厳粛な信託によるものであって、その権威は生徒達に由来し、その権力は生徒達の代表者がこれを行使し、その福利は生徒達が享受します。これは人類普遍の原理であり、…」

「何を言っているんですか？」

みんなは一瞬軽くひいた。しかしそれにかまわず一条君は続ける。
「We desire to occupy an honorable place in an international society striving for the preservation of peace, and the banishment of tyranny and slavery, …」

「今度は英語ですか！」

神田先生が言うが、一条君はやめない。

「SATが一人死んで、あの家の玄関に長時間置きっぱなしだったのは長官で、…」

「もう終わらしてください！」

羽生が神田先生に耳打ちする。

「で、でも、まだ話は終わっていません…」

「いいから終わらしてください！こんなに長くで支離滅裂な文章は異常です！」

「確かにそうですが、」

「とにかく一条君の演説をやめさせてください！」

羽生は言うが、一条君は演説をやめない。

「チェスで取った駒は使えないルールとか、ハンカチがタオルになつていたりとか、役人の不明瞭な態度とか、とにかくこの世には物足りないものが多いんです」

「ああ、勝手にあたしのセリフを！」

羽生が後ろから怒鳴るが、一条君はやめようとしなない。

- ・岡松の自殺に対する政府の対応
- ・エレベーターの社長の対応
- ・小学1年生の学習トリル
- ・完全征服 1級

「とにかく森羅万象この世には物足りないものが多すぎるんです！
教室は一瞬、静寂となった。

「ちよっと待って！」

羽生が、その雰囲気壊した。

「あたしのセリフを盗用してどうするの！」

「たまたま同じだったただだよ！」

一条君は反論した。

「どうですか、先生！」

突然振られて、神田先生はどう答えようか迷った。

「ええと・・・、とにかくこれはこれでよしにしましょう」

「その対応、物足りません！きっちり和解すべきです！」

羽生は、反論した。

「いや、だから、たまたま同じだったかもしれませんが、」

「やっぱり14歳で先生はいけませんね。警察に連絡しますよ？」

「うっ・・・。い、嫌です」

神田先生は拒否するが、羽生は鬼に勝る怖い眼を神田先生に向ける。その背中には、何者か知れぬオーラが踊っていた。

「わぁ・・・嘘です、嘘です！」

神田先生は真っ青になり震えていた。

「携帯電話を貸してください！」

「は、はい」

神田先生は言われるかままに、真っ青になって携帯電話を羽生に貸した。

「もしもし、警察ですか…」

「はい、警察です。いかがしましたか？」

「14歳なのに先生をやっている人がいるんです！」

「まあ…それはそれでよしにしましょう」

羽生はその警察の返事を聞くなり、携帯電話をかたと落とした。「物足りない警察の態度！」

羽生は、怒りに満ちた声で言った。神田先生は、ごまかしを兼ねた声で言った。

「いえ、態度が強すぎて誤認逮捕された例もありますし、それくらいがちょうど…」

「よくない！」

羽生は、神田先生に反論する。

「じゃあ、どうなの？堀江を釈放するの？言ってごらん、ただじゃおかないから」

どこからか出てきたナイフを首に突きつけられ、神田先生は応答に迷う。

「ええと、その…」

「たいたい先生の学歴も、わたしたちは生徒として物足りません！集団不登校も視野に入れて考えます！」

「い、いや、だから…」

「羽生さん！」

いきなり朝風あさめうが立ち上がって言う。

「物足りないなら自分で満たせばいいんですよ」

「えっ？」

羽生は朝風のこの言葉に反応した。朝風は続ける。

「チェスで取った駒は使えないルールは、協会を脅迫すればいいんですよ」

「そんな方法では満たせません！」

神田先生が横から反論するが、朝風は続ける。

「ハンカチ王子については、いっそのことタオル王子にしちゃえば

いいんですよ。役人は殺して自分が身代わりになっちゃえばいいんです」

羽生はしばらく考えてから、顔に笑みを浮かべる。

「それもそうね。では、神田先生については、私が代わりに警察になって逮捕します！」

「ひい！」

神田先生は悪寒を覚えた。羽生は続ける。

「私の言うとおりにしてください！」

神田先生は、教室の隅のダンボールの中に入れられた。食事は毎日一食、水っぱいスープと黒パンのみである。箱から出る事も許されず、毎日「警察官」の鞭に怯える毎日であった。

「さあ、今日も楽しい鞭の時間ですよ。」

羽生が鞭を右手に持ち左手の平に叩いて、神田先生のダンボールの前に立つ。

「ひい！」

神田先生は真っ青になった。生徒達も、その時間は目を塞ぐのだ。

羽生は、鞭を振り上げる。神田先生は頭を抑えた。

ぱーん

「ああ、僕、先生なのに…」

「黙れ。」

ぱーん

「ひい！」

第03話 僕の前は何もない 僕の後ろはごみばかり

羽生^{はせ}は、卵^らと絵を共同制作していた。羽生、卵共に図工が得意で、図工の時間は、二人の共同制作した絵に勝るものはなかった。

「おはよう」

卵が教室に入ってきて、羽生に言う。

「おはよう。」

羽生も返事をし、続ける。

「昨日の絵、卵の部分書き終わった？」

「えっ・・・？」

卵は、それを聞くなり気まずそうな顔をした。

「ええと、それは・・・打ち切り」

「打ち切り？ 冗談じゃないわよ！」

羽生は立ち上がり抗議した。

「きっちり最後まで描きあげなさいよ！」

「い、いや、だから打ち切りで…」

「何が打ち切り？」

いきなり朝風^{あさゆづ}が羽生の後ろから声をかけたものだから、羽生はびっくりして後ろを見る。

「絵。」

「絵？」

「卵がいきなり打ち切りにするって。」

「打ち切り？」

羽生はそっぽを向いて言った。

「ただでさえこの世には打ち切りがたくさんあるのに、卵まで…。」

「おおげざな…」

卵が言い返すが、羽生は無視する。

「某元首相の、負債をゼロにしますとか！」

「ああ、それありますね」

朝風も同調する。ほぼ同じ頃、教室の引き戸が開き神田先生が入る。神田先生が教壇に立つと、生徒達はみんな着席した。

「起立、礼。」

羽生の合図で、生徒達も起立礼をする。

「あ、そうだ」

朝風が思い出し、手を挙げる。

「はい、何でしょう？」

神田先生が朝風を指名すると、朝風は立ち上がる。

「ええと、学級委員長の件はどうなったのでしょうか？」

神田先生は一瞬びっくりし、そして昨日の件を思い出す。羽生の目が一番怖かった昨日の件。神田先生は、気まずそうに言った。

「ええと、それは打ち切りで……」

羽生は眼を丸くする。羽生の後ろには、鬼に勝るオーラができていた。

「ひい！」

神田先生は真っ青になる。

「打ち切りってどういうことですか！」

羽生は、憤りをぶっ放すように怒鳴った。羽生は立ち上がる。

「とにかく、この世には打ち切りが多いんです！打ち切りなんかしないで、きっちり最後まで終わらせましょう。」

「で、でも……」

こっちには学級委員長の指名が出来ない事情があるのだ。神田先生はそっぽを向く。

「何の話でしょうか？」

「とぼけないでください！」

羽生はそう言い、つかつかと教壇の方へ歩み寄り、神田先生を蹴飛ばす。

「何するんですか！」

神田先生は立ち上がり、羽生に問う。羽生は、神田先生に問い返

す。

「打ち切りなんていけません！きっちり最後まで終わらせてください！」

「は、はあ…」

立っていた朝風が、再度手を挙げる。

「何でしょう、朝風さん。」

羽生が聞くと、朝風は言った。

「この世には打ち切りが多いんですよ。三日坊主の書く小説とか」

「ああ、ありますね。」

羽生も同調する。

・ハンカチで汗を拭く

・かつてに改○

・神田先生

・大規模なソフトの製作

・某大辞典（納豆で…）

「とにかくこの世にはダメ打ち切りが多いんです！」

朝風が言うと、羽生はうなづく。

「いっそのこと、自○党の政治も打ち切って野党に回したらいいのに」

朝風がぼそりと言うと、羽生は反論する。

「打ち切りは反対です！きっちり最後までやってもらいます！」

「どうやって？」

いざ朝風に言われると、羽生は戸惑った。

「い、いや、それは…」

「あとう、HRを始めてよろしいですか？」

横から神田先生が、羽生に聞く。しかし羽生は神田先生の腹を殴る。ばかりと一打。神田先生は腹を抑え、座りこむ。

「あとう、僕、先生なのに…」

「黙れ。」

羽生はさらに神田先生の頭を殴打する。

「警察です」

いきなり教室の引き戸が開き、1人の警察官が教室に入る。

「なんですか？」

羽生が返事をする、警察官が問う。

「通報のあった先生はどちらでしょうか？」

「ああ、こいつです。」

と、羽生は座りこんでいる神田先生を指差す。

「補導します」

警察官が神田先生を見下ろして言うと、羽生は後ろから尋ねる。

「それって、先生を打ち切る事になるのですか？」

「え、いや、まあ：そういうことになりますね」

「あたしは打ち切りを許さない女！」

羽生はそう怒鳴り、警察官を殴打する。

「帰れ。」

羽生が言うと、警察官は逃げるように教室から出て行った。羽生は神田先生を見下ろして言う。

「あたしは打ち切りを許さない女です。」

「あとう…」

神田先生が羽生に尋ねる。

「昨日は正反対のことをおっしゃっていたはずですか？」

「打ち切りは絶対許しません！きっちり最後まで続けてください！」

羽生に怒鳴られ、神田先生は立ち上がる。

「それにしても昨日の通報で今頃警察が駆けつけるなんて。」

羽生がぼそりと言うと、朝風が言う。

「警察官も、行くのがめんどくさくでたらいい回しにしていたんですよ。一種の打ち切りです」

羽生は激怒した。必ず、かの邪知暴虐の公共機関を廃せねばならぬと決意した。オーラは、さらに燃えさかる。

「携帯電話を貸してください！」

神田先生が携帯電話を差し出すと、羽生はそれをぶん取り、かける。

「もしもし、警察ですか。14歳の先生を逮捕してください。」

「あの、言っている事がごろごろ変わっていませんか？」

神田先生が言うが、羽生は無視して通話を続ける。神田先生は思い切ったように言う。

「打ち切りですね」

羽生は、眼を丸くする。携帯電話をがたと落とす。

「ああ！警察の打ち切り！こっちの打ち切り！どっちを選べばいいんだ！」

羽生は両耳を塞ぎ、しゃがんで自問自答を繰り返した。

「ええと」

神田先生は教壇に立つと、腕時計を見て生徒達に言った。

「ええと、今ので1時間目に入ってしまった。しょうがないので、朝のHRは打ち切りで…」

神田先生はそこまで言い、斜め下から入って来るあまりにも強すぎる邪気に気づいた。神田先生は、悪寒を感じた。

「ええと、その…」

「あたしは、打ち切りを許さない女。」

羽生は立ち上がり、神田先生に迫る。

「あたしとあなたの恋も打ち切りますか？」

「何の話ですか？」

「打ち切る？打ち切らない？どっちだ？」

これは明らかに、結婚の脅迫である。神田先生は退る。

「い、いえ、あの、その、ええと、」

いつしか座っていた朝風が、横から口を挟む。

「神田先生は、この質問を打ちきりたかっていますよ」

羽生の背中のオーラは、龍も匹敵する者と化していた。

「打ち切りは許さぬ！朝のHRを継続せよ！」

「えーん：席についてください」

羽生が席につくと、神田先生は言った。

「では、これで朝のH Rを終わります」

生徒達が起立と礼をすると、神田先生は名簿を持って教室から出ようとした。

「待ってください！」

零時れいじが、手を挙げて神田先生に言う。

「何でしょうか？」

「朝のH R、内容がありません。これでは打ち切っているのと同じです」

同時に、羽生の目がきらりと光った。

「あたしは、打ち切りを許さない女。」

「ええと、この小説はホラーではありませんし、エロ小説でもありませんから」

神田先生はそう言うが、羽生は怒鳴る。

「再開してください！」

1時間目は自分の担当の国語ではなく、数学である。すでに教室の引き戸の向こうでは、足座あざ先生が待っている。神田先生は、やむなしと考えて言う。

「再開します。起立、礼。ええと、今日の予定は、1時間目が数学、2時間目が理科、3時間目が国語、4時間目が英語、5時間目が体育、6時間目が家庭となっています。ええと、これで終わっていいでしょうか？」

羽生が手を挙げる。

「何でしょう？」

神田先生が指名すると、羽生は立ち上がって言う。

「これでは朝のH Rの時間とは言えません。もう少し伸ばしてください。」

「ええと、あまり伸ばしすぎると…」

ここまですべて、神田先生は気まずそうに続ける。

「1時間目が打ち切りになりますよ。」

羽生のオーラは、さらに強くなった。羽生は頭を抱える。

「ああ、すごく迷う！1時間目か、朝のHRか！」

「帰りのHRの前にすればいいんですよ」

朝風が言くと、羽生はうなずく。

「それもそうね。」

「帰りのHRの前に朝のHRをやるのあんまり意味ないですから！」

神田先生が反論するが、羽生は聞いていない。

「これが打ち切りゼロの最もよいやり方ですね！」

「あわわ：ええと、地球温暖化対策のためのパイオの需要が増えて食料の耕作を打ち切ったアメリカの農家のつもりで言っていますか？」

「はい？」

神田先生がつい言ってしまったセリフを、羽生はきちんと聞いていた。

「いいですね、神田先生、いいことをおっしゃる。あつ、食料と言えど…、第二次世界大戦の時集団疎開した子供達の畑作はどうなったんですか？」

「そ、それは…」

まさか打ち切りとも言えない。

「ポツダム宣言の段階で打ち切りですか？」

羽生の続言に、神田先生はその後を言えない。羽生は続ける。

「あなたも先生なら、きっちり打ち切らずに最後までやってもらいます！」

「あの、いつまでですか？」

「いつまでも！あと、1年は組の生徒達も全員参加します！」

「はい？」

神田先生と、羽生を除く30人の生徒達は悪寒を覚えた。

31人の生徒達と神田先生は、蔵井沢のある寺へ集団疎開する事

になった。

毎日の食事は粗末で、毎日空襲におびえながら32人の人間は、寺の近くの開けたところで畑作をした。

「これで今日の作業は終わりです」

神田先生が言うと、生徒達はおてこを拭いて、

「ああ、今日もいい汗をかいたなあ…」

と、次々に言う。

「おやじみたいに言うなあああ！」

といまる
問丸が生徒達に怒鳴る。

「たいたい今は戦争中じゃありませんよ！」

問丸が神田先生に抗議するが、神田先生は後ろからの眼が怖くでなかなか返事が出来ない。後ろから声がした。

「戦争中じゃない？それはいけない。きっちり戦争中にしてあげないと。先生、携帯電話を貸してください。とれとれ、ブッシュさんですか。突然ですが、日本を攻めてください。嫌？クロス：OK？いいですが、ありがとうございます！」

「あの、そこまでしなくても…」

神田先生が横から割り込むが、羽生は例のあの眼をした。神田先生は真っ青になる。

その時、空からミサイルが落ちてきた。

「空襲よ！」

羽生が大きな声で言う。

「どんな空襲なんだああ！」

生徒達は突っ込みながらも逃げていく。

第04話 耳似た子が出来ました

その少女は、ひたすら本ばかりを読んでいた。

彼女の名は、是長読^{これはよ}。彼女の机には無数の本が積まれ、天井まで届いていた。たまに呂麻男咲子^{ろまおさきこ}がよしのぼったりするが、今日は他の友達との会話に夢中であるようであった。

「では、これより朝のHRを始めます」

神田先生が教壇に立ち、言った。

「今日の予定は昼休みに歯科検診です。では出席を取ります。糸色^{いとしき}さん、公孫田^{いづるた}さん、犬神^{いぬがみ}さん、一条君、生田君は休みですね、伊口^{いぐち}君、呂麻男^{ろまお}さん、白黒^{はくしつ}君、花田君、長谷川^{はせがわ}さんは休みですね、羽生^{はりん}さん、火厘^{ほりん}さん、八月^{はつぎ}一日君、別所^{べっしよ}君、問丸^{もんまる}君、有薬^{だやく}君、零時^{ぜいじ}君、謎十^{なぞ}君、卯^うさん、掲門^{おかと}さん、大場^{おおば}さん、冲本^{うちもと}君、前後^{まうら}君、前田^{まえだ}君、是^{これ}さん：是^{これ}さん！」

神田先生が大きく是を呼ぶが、是は本を読んでばかりで返事をしない。羽生が立ち上がり、つかつかと是の方へ近づく。

「是さん！」

羽生の怒鳴り声に是はびっくりした表情を出す、視線は相変わらず本である。

「是さん！」

再三神田先生と羽生が怒鳴るが、応答がない。とうとう羽生が、是の読んでいる本を取りあげる。

「返事をしなさい！」

羽生に怒鳴られるが、是の返事は驚くべきものであった。

「本、返して」

「タバサみたく言わないの！返して欲しいなら返事をしなさい、返事を！」

「嫌」

「はいって言いなさい！」

「嫌」

「いくら言っても聞いてくれない人はよくいますから」

神田先生が横から割り込み、羽生の取りあげた本を羽生の手から抜こうとする。

「先生！」

羽生が怒鳴る。

「いくらなんでもこれは優しすぎませんか？」

「いいえ…、人間というものは複雑で、しかも人によって違います。大まかな性格ならすぐに把握できますが、細かい性格を把握するのは難しいです。だから、細かい性格が分からないうちは、相手の反応を見てから対策した方がいいと思いますか…」

「いけません！」

羽生は再度怒鳴る。

「いくらあなたがあたしより1歳か2歳年上だからって、そんな偉そうに言うことはないわよ！」

「で、でも、年上ってことには変わりありませんし」

「そんな根拠で本を返すくらいなら、教育委員会に訴えますよ。」

「い、いや、言っても聞いてくれない人はいくらでもいますよ」

「あんたもじゃないですか！」

「……」

「でも、先生の言うことは、半分は正しいですね。」

「正しいと認めるならば、正しい行動をしてください」

「嫌です。」

「はい？」

「いくら言っても聞いてくれない人がいなくなるまで、この本は返しません。」

「い、いや、だから、それは没収と同じでは…」

「しかもこの本のタイトル、ひ〇らしですよ。未成年には望ましくない」とされている本です。」

「あうう」

是が、追い詰められたようにふらりと立ち上がる。羽生が言う。

「あんたはこの前もひ○らしを持ち込みましたね！いくら言っても聞かないんだから…。」

「2回目…」

是はぼつりと反論するが、羽生は聞いていない。

- ・依存症
- ・お金の事ばかり考えている人々
- ・ゲームのバグを逆用する人々
- ・食べ物好き嫌い
- ・中国人グループによる人気商品の大量買い上げ
- ・核
- ・僕？

「とにかくこの世には森羅万象、いくら言っても聞かない人がいるんです！」

羽生が誇らしげに言うが、神田先生が反論する。

「この小説の作者だって、パソコンをやめて受験勉強しなさいといくら言われても全然聞かないで、さよなら希望先生のアニメばかり検索しているんですから！」

「当時の話ですから…って、そういう問題じゃなくで！話題を反らさないでください！」

二人は言い合うが、横で第三者が会話を始めた。

「そういえば、政治でもいくら言っても聞かない人がいたよね」
零時が前田と、おしゃべりを始めた。

「そうだね、ライ○ドアのメール問題でやめさせられた民○党の議員とか」

その会話を、羽生は拾い聞きしていた。
「それよ！」

羽生は二人に割って入る。零時と前田はびっくりする。

「もしかしてあの議員…」

「違う！」

羽生は反論する。

「おしゃべり！」

「はい？」

「授業中の私語は、一度してしまおうと癖になっちゃうのよね！」

「……」

二人は困った顔をして顔を見合わせる。

「とにかく」

神田先生が羽生に言う。

「すっかり忘れられたようですが、是さん日本を返してください」
羽生はそのセリフに反応する。

・くさんに本を ↓ くさん日本を

・車で行く ↓ 来るまで行く

・墓石 ↓ 破壊師

「作者のパソコンのIMEも、いくら変換しなおしても次の変換の時にはまだ同じ変換をしてしまうのよね！」

「あの、そんなにいちいち敏感に反応しなくても…」

神田先生が言うが、羽生は無視していつも通りの独り言を始める。
周りの人々は冷や汗をかきながら聞いた。

「暴政だ！」

「暴政が始まった！」

そんな声が、どこからか響く。

「まず、神田先生。」

羽生は真っ黒な顔をして、神田先生の肩を叩く。

「くしゃみをして人のパンツを見るような十歳の男の子が、いくら言われてもくしゃみをやめないんですよね！」

「いや、だから、それはやりたくでやっているわけでは…」

「それに、14歳の先生。」

「こっちもやりたくでやっているわけでは…」

「先生になった経過を教えてください！」

「いや、ですから…」

「いくら言っても先生を辞めない。一応免許は持っているんですね？」

「はい、国語だけです…」

「14歳の分際で中学の国語？笑わせるわね。」

「ひい！」

神田先生は真っ青になる。羽生は続ける。

「いくら言ってもやめない…一回命令されたらとまりなさい！」

「それじゃロボットと同じじゃないですか！」

神田先生が反論すると、羽生は顔に笑みを浮かべる。

「それよ。」

「はい？」

神田先生と生徒達は、嫌な予感を覚えた。羽生は悠々と言い始めた。

「全員がロボットになればいいんだわ。というわけで、生徒の皆さんには死んでもらいます」

「はい？何でロボットにするためにそこまでやらないといけないんですか？」

神田先生が反論するが、羽生はさらに続ける。

「世界で全く同じ人が二人いたら嫌でしょう？」

「いや、だから何で機械を残して生き物を殺すんですか！」

「ともかく、あんたから死んでいただきます。」

「はい？」

神田先生は退る。

「携帯電話を貸してください。」

「は、はい」

神田先生は、震える手で携帯電話を羽生に渡す。羽生は携帯電話をかばっと開けて、警察に連絡する。

「もしもし。」

「はい、警察です」

「突然ですが、あたしの周りにいる人を全員殺してください。」

生徒達は、羽生のこの発言を聞き、真っ青になって部屋から出ようとする。

「理由？もちろんないわよ。え、だめ？クロス…いいですか？ありがとうございます！」

羽生はそう言い、教室からぞろぞろ出ようとする生徒達を片っ端から捕まえようとする。

「神田先生！」

最初に捕まえたのは、神田先生であった。

「先生として、生徒達を統率してください！」

「あ、あの、そう言われましても…」

先生としゃべっている隙に、生徒達は全員教室から出て行ってしまった。教室は、神田先生と羽生の二人のみになった。

「どうしてくれるんですか、先生！生徒達を全員呼び戻してください！！」

「いいえ…、先生として生徒達をまとめるのも大事ですが、先生の義務はもう一つあります。」

「何？」

羽生は、鬼に勝る顔で尋ねる。

「先生は、生徒達に勉強を教えるのと同時に、生徒達を危険から守らなければいけません。親から預かった子供達ですから」

羽生は神田先生の襟をつかむ。

「あんたも子供じゃないの！14歳と聞いて親もかっかりするわよ！」

「は…いえ…」

神田先生はうつむいた。羽生は、しばらく考えてから言った。

「いいわ。」

「へ？」

「教室をもう一つ作る。」

「は、はあ」

「ただし、あたしの予定があんたのせいではるぼろになったのよ？
一人二役でないと困るわ！」

「はい？」

神田先生は、さりげなく悪寒がした。

「では、これより国語の授業を始めます」

神田先生は教壇に立ち、生徒達の前で言う。神田先生はちらちら腕時計を見ながら黒板に向かう。やがて、神田先生は生徒達に言う。
「10分経ちました」

その合図で、先生と生徒達はみんな教科書とノートと筆記用具を持って、教室から出る。向かう先は、もう一つの一年は組の教室である。全員が着席したのを確認して、神田先生は黒板に書き始める。
やがて10分経ち、教室を変え…。

「って、これあまり意味ないですから！」

3回目の「国語」で、神田先生が羽生に突っ込むが、羽生はにんまりと笑って言う。

「条件よ、条件。それとも、死をお望みなら？」

「ひい！」

神田先生は真っ青になる。

第05話 1減らせば済むことなのか

「姫甥菓子博^{ひめい}2008まであと313日です！」

朝、テレビ画面で、羽生はニュースを見ていた。

「姫甥菓子博とは、兵庫県姫甥市で開催される…」

ニュースのアナウンサーが伝えることを、羽生はパンを食べながら聞き流した。

学校。羽生は、教室に入った。

「おはよう、委員長さん」

教室に入ってすぐに朝風^{あさゆう}から声をかけられる。羽生は毎日朝一番に来ていたのだが、今日は朝風が一番で、自分は二番らしい。

「誰が委員長よ？」

羽生は尋ねる。

「あなたじゃないの」

「はあ？」

「今日、委員長と副委員長と書記の任命式なんだけど、このクラス、まだ決めてないでしょ？だから神田先生がしょうがなく羽生さんを強制的に…」

「えっ？なに？ちょっと待って！」

「本当の話だから」

羽生は、そういう朝風を押しつけて、黒板を見る。

”前期 委員長 羽生かおる 副委員長 八月一日^{ほずみさとし}聡 書記 朝風 まき”

黒板にはこう書かれていた。

「なに勝手に決めているのよ！」

その時、引き戸が静かに開いた。

「おはよう」

その人の顔を見て、羽生が、その少女に言う。

「あれ、誰だっけ？あんだ。」

その少女は、羽生に応答もせずに黙って教室に入る。

「長谷川よ、長谷川」

朝風が羽生にささやぐ。

「長谷川？ああ、10番ね。」

羽生もそう言う。しかし急に思い出したように、朝風に怒鳴る。

「ってか、委員長の話はどうなったのよ！」

「ああ、しょうがないね」

「しょうがないって、何よ！」

教室の引き戸が再び開き、前田と零時が入る。

「あ、おはようございます、羽生さん」

零時が羽生に挨拶すると、羽生は怒って反応する。

「おはよう！」

「ああ：、そういえば菓子博まであと313日だったね」

零時が前田に言う。

「そうだね。それにこの姫甥市立一ノ谷中学校の生徒達は全員参加するって」

「へー」

二人はそう話しながら、自分の席へ向かう。

「なんか今日はいらいらする。」

羽生はそう言い、朝風を睨む。朝風はそれに対して何の反応も示さずに、羽生に明るく語りかける。

「そういえば、私の妹出産予定日まであと24日よ」

「はい？お母さん妊娠してたの？」

朝風はこくつとうなずく。

「お母さんね、名前は例磊れらいにするって」

「レイねえ：。例磊：。どっかで聞いたような名前。」

「まあそれはそれとして、」

「おはよう」

引き戸が開き、糸色いとしきが入る。

「あたしのお父さんの命日まであと53日だって」

「え？お父さん、死んでたの？」

羽生が尋ねると、糸色は首を横に振る。

「53日後に自殺するって。」

「なんじゃそりゃ！」

羽生は呆れるが、糸色は黙って二人の間を抜けて席へ向かう。羽生はドアを閉めながら、

「最近のカウントする人が多いわね。」

「まあ、しょうがないじゃないの。時代の潮流だし」

朝風が言うと、羽生はいらっとした顔で言った。

「それじゃ、今までの潮流はどうなったの！？」

「ええと…」

朝風がそこまで言うと、再び引き戸が開く。赤木であった。

「わん」

「何犬の真似しているのよ！挨拶は？」

羽生が怒鳴ると、赤木は引き戸を閉めながら答えた。

「挨拶代わりに犬の鳴きまねをするプーム到来まで、あと45日です」

「勝手な事ぬかすな！てか誰もこれもみんな何をカウントしているんだ！」

「潮流ですから」

赤木はそう答え、「失礼」と、二人の間を抜けて席へ向かう。

「起立。礼。おはようございます」

神田先生が教室で生徒達と挨拶をする。

「では、これより朝のHRを始めます」

神田先生がそう言った頃、羽生が立ち上がる。

「あ、羽生さん、委員長のことですか？」

神田先生が尋ねると、羽生は首を横に振る。

「あんた、何か言う事ありませんでした？」

「ああ、はい、ええと、僕の妹の誕生日まであと3日ですね」

「はい？」

羽生は、今まで胸の中にあったわだかまりがぶち切れる思いをした。

「何で最近の日本人は、何でもかんでもカウントするんですか！」

「いや、急にそう言われましても」

神田先生はためらうが、羽生はいつも通りつかつかと教壇へ歩み寄り、神田先生に怒鳴る。

「カウントの数字ばかり覚えていて、当日の日付が分からなくなるんです！」

「ああ、確かに、カウントって当日の日付を入れているか入っていないかややこしいですしね」

「その通りです！それなのに日本人は何でもかんでもカウントしようとする…。」

・MYKblog

・テレビアニメ放送の公式サイトでの「放送まであと〇日」

・しんち〇ん15周年まであと〇週間

・CUR〇RUへの移行まであと〇日

・閉鎖まであと〇日

・福本さんの漫画：最終話まであと〇週間

「何でもかんでもカウントしようとしているんです！」

「それもそうですね。世の中には、くだらないことをカウントする人も多いですし」

神田先生が言うと、羽生がさらに深く掘り下げる。

「この小説の作者まで、JavaScriptを使ってカウントするプログラムまで作っていますし、絶交しましょう。」

「いえ…」

「一緒に駅前へ来てください！ダメカウントしている人が多いんで

すから!」

「いや、今はHR中だし…」

神田先生が言うと、羽生は例のあの眼をする。

「ひゃあ!『例のあの眼』みたいに言わないでください!」

神田先生は真っ青になり、退る。羽生は言う。

「じゃあ従ってください!」

先生と生徒達は、みんな駅前へ向かった。

「あうう、1時間目国語なのに…」

神田先生は泣きながら、羽生の背中についていく。

「ありましたよ、先生。」

羽生が神田先生に言う。

「何ですか?」

「姫甥菓子博2008のカウントです。」

「ああ」

羽生は、生返事をする神田先生を無視して、周りを見回す。と、

羽生の肩を叩く者がいた。

「どなたです?」

羽生がその男に尋ねると、男は言った。

「地球滅亡まであと何日ですか?」

「えっ…」

羽生は答えに戸惑う。

「答えは一つですよ」

朝風が横から割り込む。

「2006年です」

「3年後?」

「アン○リ○○ーでこの前やっていた予言特集です」

「ああ、それ結局は外れるのよね。作者も、一生懸命心配してたのに損したって。」

二人が話していると、男はさらに神田先生に尋ねる。

「麻○首相が退陣するまであと何日ですか？」

神田先生は答えに詰まった。

「た、確かに支持率は低迷していますが、それはあまりに唐突かつナーバスでは……」

男は続ける。

「次の衆議選で退陣しますか？」

「い、いや……。というか、あんた誰ですか！」

「そんなことより、民○党が自○党に勝つまであと何日ですか？」

答えに詰まる神田先生に、男性はさらに追い討ちをかける。

- ・次に酸性雨が降る日
- ・次に光化学スモック注意報が出る日
- ・次に大型ハリケーンがアメリカに来る日
- ・北極の氷が全部解ける日
- ・地球が滅亡する日
- ・はしかが世界的な病気と認定される日
- ・三国○NET K○Y Ve○sionが閉鎖する日
- ・KMYが死ぬ日
- ・あの子と付き合える日

「まで、あと何日ですか？」

神田先生は呆れた。

「い、いや、そんなカウントはしたくないですから！特に最後！」

神田先生はそう言いつつ、後ろで地球滅亡の日について複雑な計算をしている羽生に、背中から尋ねる。

「ここは危険です。教室へ避難しますよ」

「待って、この計算が終わってから。」

「もう、羽生を抜いて避難しましょう！」

神田先生と生徒達は、教室へ走るように戻っていった。

「やっと出た。地球滅亡の日。」

羽生が、そこいらの人を脅迫してもらったA4のコピー用紙10枚にわたる長大な計算式の結論を神田先生に読みあげようとした時。

「あれ？先生…先生！」

駅前にいる姫甥私立一ノ谷中学校関係者は、自分しかないのに気づいた。

「駅前は危険ですね。ええと、1時間目の国語が終わるまであと30分ですね」

神田先生が腕時計を見ながらそう言うのと、羽生が教室の引き戸をバンと開けるのと、ほぼ同時であった。

「羽生さん！」

神田先生は青くなる。羽生は、はあはあと息を漏らしながら、大きな声で言う。

「今、カウントしましたね！」

「あ…いえ、その…」

「あたしは、カウントは許さない女！」

「いつからですか？」

神田先生が突っ込むが、羽生はさらに言う。

「そんなにカウントが好きなら、きっちり一秒一秒ちゃんとカウントしてください！」

「はい？」

神田先生は、悪寒を覚えた。

「今から、1時間目が終わるまでカウントしなさい！」

「いや、そう言われなくても」

神田先生はそう言うが、羽生は例のあの眼をした。

「ひい！嘘です、やります！ええと、1時間目が終わるまであと28分37秒、28分36秒…」

「その時計、時報と合っていますか？」

羽生はそう言い、神田先生に詰め寄る。

「携帯を貸してください。」

「は、はい」

神田先生から携帯電話を借りると、羽生は時報案内へ電話をかける。時報を確認すると、羽生は神田先生に言った。

「あと27分59秒です。」

「は、はい。27分58秒、57、56、55、54、53、52、51、…」

神田先生は早口でそう言った。

「違う。」

「はい？」

「実際の時間と2496ミリの誤差があります。」

「そんな、ミリ秒単位の誤差はいいじゃないですか」

「だめです、先生。カウントするならきっちりしてください！」

「カウントする人は楽しい気持ちでカウントしているんですよ。そこまできちんとしたら楽しくなくなります！」

「それがどうしましたか？先生。」

「ひい！いい、いえ、あの…」

「あたしは、カウントを許さない女。これによってカウントする人が減ったら幸いね。」

「は、はい」

神田先生は真っ青になる。羽生は続ける。

「分かったらカウントしてください！」

「ひい！」

しろと言われても、ミリ秒単位まで細かくされると、どうやってカウントすればいいのか迷う神田先生であった。

第06話 バイバイ

羽生は、学校の教室で、読書タイムで「神〇先生」という名の本を読んでいた。その本は”誰もが認めた世界一つまらなく、吐き気を催すのに最適”とされている小説で、K〇Y原作で、ある程度の厚さはあった。

読書タイムを終え、羽生はその本をバサツと机の上に置く。

「こんな本にするんじゃないかった。つまらない。」

すると、羽生の隣で、終了の合図を過ぎてもなお本を読み続けている是が、珍しく羽生の方を向いている。

「な、何よ。」

羽生が尋ねると、是は言った。

「ズル、しましたね」

「はあ？これはとってもつまらない小説なのよ。これを読んでどこがズルなの？」

そんな羽生に、背後から朝風あさめうがぼそりと声をかける。

「それ、一刷だから」

「どういうこと？」

羽生は振り向き、朝風に尋ねる。朝風は応じた。

「最初のものには価値があるということですよ」

「はい？」

「最初のものには価値があるのに、続くほど価値が減っていくのです」

朝風のセリフに、赤木が便乗する。

「第一話では期待させておいて、第二話では急につまらない内容になるんです。つまり、第一話が最新話になっているうちは価値があるんです。神〇先生とか」

朝風が応じる。

「神〇先生だけじゃありませんよ。世の中のありとあらゆる小説、

そして漫画、みんなみんな最初のうちは読者に期待させておいて、進むほどに読者の期待を裏切って行くのです」

その二人のやり取りを聞いて、羽生は耐えられなくなった。いきなり立ち上がり、教壇に向かって怒鳴る。

「神田先生！」

「ひ！」

嫌な予感のした神田先生は、退る。

「な、何でしょう」

「価値を維持させてください！」

「何の話ですか？」

「一度決めた価値は、きっちり維持してください！」

羽生は教壇へ歩み寄る。是は、読書を再開している。羽生は、神田先生に詰め寄る。

・タイムサービス

・居候

・テレビ東〇のアニメ

・佐藤、田中、小泉、安陪

「とにかく、進行していくごとに価値が減っていくものが沢山あるんです！先生、責任を取ってください！」

羽生に襟をつかまれた神田先生は、応じる。

「い、いや、別に僕の所為では」

「先生」

一人の生徒が手を上げる。

「あ、犬神さん」

神田先生が応じると、犬神は立ち上がる。その犬神の姿を見て、

神田先生は眼を丸くする。

「あ、あの、ベツトは持ち込み禁止ですよ？」

犬神の腕には蛇、頭には犬の耳みたいなもの、肩には鳥がおり、

さらに黒猫を抱いている。犬神は言った。

「ええと、この前ライオンを動物園から盗みましたが、あたしの家で動物が増えすぎたら逆に可愛くありませんね」

「逆に減ると思いますか！食べられるし」

神田先生が突っ込むが、犬神は続ける。

「増えすぎたら価値がなくなるものですね」

「そうとは限りませんよ」

朝風が立ち上がり、犬神の方を向いて言う。朝風は、教室の隅、自分の斜め後ろを指差す。そこには、机にたくさんの水着を、並べてもどうしても重なってしまいうくらいたくさん並べて、片っ端から水着をなめたりキスしたりを繰り返している少年がいた。

「水着コレクターの八月一日聡君です」
ほずみさとし

神田先生は呆れた。

「水着をなめているのはもはやコレクターとかではなく変態のたぐいですから！」

朝風は続ける。

「それだけでなく、是さんもいらっしやいますよ」

「本の多さには圧倒されましたが、繰り返し読んでいるわけではありませんから」

神田先生がそこまで言うのと、長谷川が手を挙げた。

「長谷川さん」

神田先生が当てると、長谷川は立たずに言った。

「前に座っている犬をどうにかできませんか？動物、迷惑です」

「は、はあ…」

神田先生は、長谷川の前に席を取っている犬神の方へ歩み寄る。

「犬神さん、ベツトは学校に持って来ないでください。というか家にはいくつベツトがいるんですか？」

「ええと、パンダ、ドラゴン、幽霊、オコジョ、赤ちゃん…」

「全部家にいるのはありえないですから！というか、赤ちゃんは？妹ですか？」

「四国に旅行に行った時、ポストから拾いました」

「ポストから拾って：あのポストですか！？だめですよ！ポストに返してください！」

「とにかく。」

羽生が教壇に立ち、神田先生に向かって怒鳴る。

「高校生を教える17歳の先生、中学生を教える10歳の某魔法使い英語教師、そして神田先生：14歳。とにかく最近は未成年の先生が増えすぎでそういった話つまらなくなりました。」

「あ、あの、僕はやりたくでやっているわけでは…」

神田先生が教壇に戻ると、羽生はさらに続ける。

「17歳はともかく、10歳と14歳は許せないんです！」

「そういえば、最近魔法の話が増えていますね」

赤木が横から割り込む。

・魔法

・未成年の教師

・個性的な人たち

「最近似たような内容の小説が多くなってきましたね。K○Yも魔法を敬遠し出しましたし…」

「結局敬遠できていないじゃないですか！」

神田先生は反論するが、赤木は言った。

「増えすぎで自分が読みたい小説が見つからなくなる。インフレの障害ですよ」

「あ、あの」

神田先生は反論の糸口を探そうとするが、羽生が横から神田先生に言う。

「全部梅どんの責任です！」

「い、いいえ、梅さんの責任ではないと思います。みんなの夢が…」
神田先生がそこまで言うのと、羽生は神田先生の腹を殴る。

「とにかく某小説投稿サイトの管理者には更迭してもらいます!」
「い、いや、だから、そんなことを梅さんの圏内で言ってしまったら大変なことになりますよ!」

神田先生が何か言葉を探そうとすると、いきなり引き戸が開く。

「K○Y秘密警察です」

私服を着ているその男の姿を見て、神田先生は男に言う。

「3日前、駅前で会った男じゃありませんか!」

「やあ、久しぶりですね」

男は言い、一区切りつけて教壇へ歩み寄る。

「それ以上言うとK○Yさんの作者登録が削除されてしまう恐れがあるとの懸念から、K○Yさんの指示で逮捕します。羽生かおるさん」

男は羽生の手に手錠をかける。

「な、何ですか!」

羽生が男に怒鳴るが、男は黙って羽生の手錠をぐいぐい引っ張る。引き戸が閉まる。二人は、教室から出て行ってしまった。

その様を見て、神田先生は安堵のため息を漏らす。

「羽生さんは、法律で死刑になるかもしれませんね。まあそれはそれでいいとして、HRを始めましょう。出席を取ります」

「先生」

一人の生徒が手を挙げる。

「ああ、佐々木君」

佐々木は立ち上がり、先生に問う。

「ロシアですか?」

「はい?」

神田先生は眼を点にする。

「なぜロシアの話になるのですか?」

「あ、いや、だから秘密警察とか出ていましたので…」

「ああ、確かに秘密警察：サード○イ…って、話題をそらさないでください! いいかげん朝のHRを始めますよ。」

「ちょっと待ってください。」

いきなり引き戸が開き、羽生が現れる。

「はい？逮捕されましたはずですが？」

神田先生が羽生に問うと同時に、羽生の手が赤っぽくなっていたので見た。

「ひ！」

なんと、羽生の手には、血に染まったナイフが握られていた。

「こ、殺したんですか！」

「まあね。」

羽生はさらりと言い、教壇へ歩み寄り神田先生に言う。

「殺した時、思いついたんです。増えすぎたら、余分な物を削ったほうがいいじゃないですか」

「な、なんとか嫌な予感がします」

羽生はチラッと生徒達の方を見る。

「生徒の数が31人。春の野原に似せたいのは分かりますが、せいぜい女の子はう○ひなみたく6人で結構」

「ひ！」

生徒達は真っ青になり、がくがくと隣の席の人を抱き合う。

「まず生田万。いくたよろず毎日欠席なのね。」

「あ、ちゃんと毎日通っていますよ」

犬神が羽生に言う。

「その席に、毎日座っています」

「嘘をつけ。」

羽生はそう言うが、犬神は続ける。

「チョンマケに着物を着ているから、すぐ分かります」

「どこ？」

羽生は、血まみれのナイフを右手にぐっと握り、犬神に尋ねる。

犬神は答える。

「その席です」

「空っぽじゃない。」

「ちゃんと座っていますよ」

羽生は、ナイフをさくつと生田の机に強く刺し、犬神に怒鳴る。

「言っておきますが、あたしには見えません。以上。」

「ええと、H R中です」

神田先生が言うが、羽生は神田先生を、例のあの眼で睨む。

「ひい！」

神田先生は真っ青になる。羽生は続ける。

「思えば、このクラスで一番いらないのは、先生でしたね。そもそも存在自体が違反ですし。」

「ひい！ね、ネギのほうが悪質なのは…」

「後悔しなさい。」

羽生はそう言い、机からナイフを抜こうとする。しかしぬけない。羽生は両手で抜こうとするが、これもまだ抜けない。

「呪いですよ」

犬神が言うと、羽生は犬神に尋ねる。

「呪い？」

「だって、生田君、幽霊ですから」

その語句を聞くなり、羽生はいきなり真っ青になり、絶句して倒れた。

「ああ、気絶してしまいました」

神田先生が教壇に立ち、改めて生徒達に言う。

「確かに羽生さんの暴走も、回を重ねるごとにつまらなくなってきましたね。羽美さんと反比例ですし」

生徒達もうなずく。むしろ命に関わるのである。

「で、どうします？羽生さんを保健室に連れて行く人」

神田先生が聞くが、生徒達は誰一人手を挙げようとしなない。神田先生は生徒達を見回す。一人だけ手を上げている少女に気づいた。

「長谷川さん」

長谷川は黙って立ち上がり、生田の席の前で気絶している羽生を背中に抱き、黙って教室から出て行く。引き戸が閉まると、神田先

生は評価する。

「彼女、強いですね」

「強いわけではありません」

朝風が言う。

「それはどういことなのですか？」

「彼女の父、幽霊ですから」

「はい？」

神田先生は真っ青になる。しかし朝風は平然と続ける。

「幽霊インフレですよ。最近は幽霊を主人公にした小説も増えていきますね」

「あの、幽霊と決まったわけでは！それに生徒の一人に幽霊なんてまんまあの漫画のいじりと思われるじゃないですか！」

神田先生が反論するが、朝風は続ける。

「思春期の反抗も多すぎますね。多すぎで対応が機械的になりかちです」

「それはどうでもいいですから！」

「それに、幽霊がいる以上霊能者もいなければいけません」

朝風はそう言い、ちらっと犬神を見る。

「犬神さん、幽霊見えるんですか？」

神田先生が尋ねると、犬神は短く言った。

「まあね」

「そうですか…、では余談は置いといて、」

神田先生がHRを続けようとしたその時、引き戸がいきなり開く。

「大丈夫のようです」

長谷川が神田先生に短く言い、自分の席へ戻る。そこへ残った少女、その名は羽生かおる。

「ひい！」

神田先生は再度真っ青になる。羽生は続ける。

「余談多すぎ！ちよっとだけの余談なら続きをしたくなりますが、たくさん余談をすると価値がなくなりますよね。」

「そ、それも確かにその通りなのですが、」

「では、先生、一つ提案をします。」

「な、何ですか」

神田先生は嫌な予感を覚えた。

「では、出席を取ります」

羽生を除くその教室にいる人々は、みんなあきれ返っていた。

「糸色^{いとしき}さん、公孫^{こうそん}田さん、犬神さん、一条君、生田君、伊口^{いぐち}君、…」

神田先生は、あまりに過酷な事情で、生徒達の名の読み上げをやめた。出席を取るのが、あまりにも静寂過ぎるのである。すなわち、余談禁止の故に生徒達全員がマスクをしているのである。

「では、3時間目の国語の勉強を始めます。まず、今回の新出漢字ですが、これを読める人は手を挙げてください」

神田先生は言うには言うが、生徒達は発言が出来ないから手が挙げられない。

「って、雑談以外の時もしゃべれませんから！」

神田先生が教壇をバンと叩き、羽生に反論する。しかし羽生はマスクを外して言う。

「セリフも、増えすぎたら訳がわからなくなります。正当な処置です。特にこの小説はセリフが多すぎます。」

「い、いや、だから、そこまでしなくても…」

「なら、神田先生が実は魔法使いだったという当初の設計を修正することを約束しますか？」

「約束します、ってかそのことはもともと第06話発表時点では決まっていなかったことですし！」

「魔法が出てくる小説が増えてきてK○Yも魔法を形式上敬遠している以上、きっちり魔法をこの小説から排除しなければいけません。ええと、当初の設計では、あなたの他に、長谷川さん、あたし、零時君、その他女子を中心に魔法が項目になっているものがありますね。」

「は、はい」

「全部、撤去してください。」

「あ、あの、僕は作者ではありませんから……」

神田先生がそう言うと、羽生は例のあの眼をする。

「ひい！」

神田先生は真っ青になる。羽生は続ける。

「キティみたいに、ヴァンパイアの設計を持った少女もいると聞きましたか？」

「い、いや、だから、歯科検診の時は必ず学校を休む人もいますが、それはちよつと……って、ネタバレ」

「いっそのこと、この小説からファンタジーを一掃することを要求します。」

「ひい！僕、作者じゃないのに……」

神田先生が言うが、羽生は例のあの眼をする

「黙れ。」

「ひい！」

神田先生は真っ青になり、退る。これから自分がしなければいけないことが垣間見えてきた。

第06話 バイバイン（後書き）

次回第07話は、新「神田先生」の書き下ろしです。お楽しみに。

第07話 抗議と変人

2003年4月25日金曜日。一人の少女は、校長室のドアをノックしていた。

「入りなさい」

中からの声とともに、羽生は丁寧にドアを開けると、校長室に入って礼をする。

「校長先生。」

「何だね」

大きな窓を背にした大きな木の机に腰をかけている、年配の面の校長先生、有川武に、羽生は一步一步歩み寄って言う。

「突然ですが、あたし、1年は組になりました。」

「ああ、それはおめでとう。まだ餞別かね？」

「いいえ。」

羽生は、校長先生の机の前つばに手をかけられる位置まで来ると、やや強めの声で尋ねる。

「あたしの1年は組の担任の神田先生ですが、」

羽生がそこまで言うのと、校長先生は口を挟む。

「ああ、この小説はコー〇〇ブレ〇カーより先に発表されたからそこは大丈夫」

「その話ではなく。」

羽生は、はあっとため息をつく。

「労働基準法では、15歳の誕生日の次の3月31日を経過しないと一切の労働をすることが認められませんが、まあ第2項では俳優などに限ってこれを免除する旨が書いてありますが教師はどう見ても俳優ではないでしょう、で、」

「その話かね：来ると思っていたよ、でもよりにもよって君とは」

校長先生は椅子から立ち上がると、後ろの窓のほうを向く。

「なぜ、神田先生の就任を許したんですか！」

校長先生は、窓の外の、ありふれた街の景色を眺めながら、はあ
つとため息をつく。

「かおる」

「はい。」

「世の中には…、大人の事情だけでは割り切れない、何かがあるの
だよ」

校長先生はそう言って、羽生を振り向く。

「おこづかいをあげるからそれで勘弁しなさい」

「できません。」

羽生は、首を横に振る。

「…あの人の恐喝だ」

校長先生がぼそりと言うと、羽生は机に身を乗り出す。

「それは誰ですか！？教えてください！！」

それと同時に、ぼんと銃声が響く。がっしやんと、校長先生の
後ろの窓がごとく割れ落ちる。羽生は思わず校長先生に注視し
たが、校長先生は無事に何食わぬ顔をして立っていた。

「ちっ！ヤモリが絡んでいるのか！」

羽生が制服の脇のポケットに手を伸ばそうとすると、校長先生は
大きめの声で言う。

「私は…人質だ」

「……えっ？」

羽生は、思わず声を上げる。校長先生は、視線を落としていた。

「かおる」

「はい。」

「君は、何も知らずにここで普通に生活していきなさい」
「できません。」

羽生は、怒鳴る。

「私は、自分が正しいと思ったことだけをやります。」

「しかし、それが曲がり通らぬとしたら？」

「全力で駆け抜けます。」

「しかし、ゴールが見えないとしたら？」

「見えるまで駆け抜けます。」

「しかし、駆け抜けるための足が細いとしたら？」

「鍛えます。」

羽生がそう言うのと、校長先生は困った顔をする。

「私の命令だ。おこづかいは好きなだけあげるから、出て行って欲しい」

校長先生の一言に、羽生は呆然とした顔で突っ立っていた。校長先生は、頭を抱えて椅子に座ると、再び顔を上げる。

「出て行きなさい」

「……はい。」

羽生は、しょんぼりとした顔をして、とぼとぼと校長室から出て行く。ドアが閉まると、校長先生はゆっくりと立ち上がる。

「さて」

校長先生は、スーツの脇のポケットから一本の――、ペンくらいのサイズの木の棒、杖を取り出すと、足元に割れ散らばっているガラスに向ける。

「リターン」

ガラスの破片らは浮かび上がり、それぞれの元いた場所へ戻っていく。窓は再び、元とおりになってゆく。元通りにきれいになった窓を見上げ、校長先生ははあっとため息をつき、杖を脇のポケットに入れる。

「やれやれ…、この年になって使うとは思わなかったな」

そうつぶやくと、再び椅子に腰掛ける。そうして、手を組みその上にあごを乗せ、視線を少々上へ上げる。少し重い声で、校長先生は一息ついた。

「――魔法を」

「まったく、役立たずなんだから。」

羽生はそれだけ言うと、校長室の前から離れていく。

「校長先生と、何があつたの？」
横に朝風あさゆづがついて来る。

「朝風。」

羽生は、朝風の顔をじっと見つめる。

「な…何？」

朝風が少し戸惑いながらもにこつとした顔で尋ねると、羽生は首を横に振る。

「あたしたちは…、大変な学校に来てしまったかもね。」

「え？ どういうこと？」

「朝風さん。」

羽生は、真顔で朝風の目を見る。

「もしできることなら、できるだけ早く別の中学校を探したほうがいいわよ。」

「どうして？」

朝風が疑問そうに尋ねるが、羽生は口を開けない。

「そんな事いわないで、もっと明るくこの学校を過ごそうよ！ ね？」

朝風がにこつと羽生に言うのと、羽生は少し微笑む。その微笑みが微妙に無理やりな感じがしたので、朝風は心配そうな顔になる。

「大丈夫？ 今朝、何か悪いもの食べたの？」

「大丈夫。こんなの、作者の恋煩いに比べたらなんでもないから。」

「そう、よかった！」

朝風はにこつとそう言うのと、るるるるんと廊下を走り出す。

「ちよつと！ 朝風さん！ 廊下は走っちゃ…。」

「まあ、いいでしょ」

後ろから羽生の肩に手を置く。

「赤木さん」

羽生は振り向いて言う。

「いいんちょ、最近暗すぎるよ！。大丈夫？」

「だ…大丈夫。」

「こういうのは、」

赤木はそう言い、羽生の両肩に手を置く。

「わたしの妄想で治してあげる！」

「へ？」

羽生は一瞬、眼を点にする。

「ルンパ、ルンパ、ルンパ、ルンパ、人として軸が」

「どんな呪文よ。」

羽生はいささかあきれた顔をする。

「ふふっ、その顔！」

赤木は顔を上げる。

「わたし、いいんちよのあきれてる顔が一番好き！」

「えっ……。」

羽生は一瞬、赤木の笑顔にどきっとする。

「それじゃ、ね！」

赤木はそう言い、これまだるんるんと廊下を走り出す。

「……こら！！廊下は走っちゃだめでしょ！」

羽生は後ろからこう怒鳴った。

「まったく。」

羽生はそう言い、自分の教室へ歩いていく。

「羽生さん、めずらしいですね」

すれ違った神田先生が、羽生に声をかける。

「えっ？何がです？」

羽生が神田先生に尋ねると、神田先生はにこつと答える。

「授業、始まってますよ」

「え……」

羽生はどきっとする。

「な……」

羽生は全力で、自分の教室へ駆け出した。

「あ、廊下をそんなに速く走ったら……」

神田先生は、いささかあきれたようにそう言ってから、次の自分の受け持ちのクラスへ早足で歩いていく。

「今日のいいんちよ、珍しかったなあ」

「ああ、そうだな、授業に遅れるなんて」

その日の昼休みの教室で、零時治と前田渉の間でこんな会話が交わされる。

と、そこに。

「やあ！」

みやびやま

龍山が、二人に声をかける。その龍山の容姿を見て、零時と前田の二人は同時にどきつとする。

「ずぶ：濡れ」

龍山の服はずぶ濡れで、髪の毛も水びたし。手の先も、体中どこまでも、先ほどまでプールに入っていたかのように水びたしであった。

「プールにでも入ったのか？」

前田が冗談のつもりで言うのと、龍山は途端に朗らかな顔をする。

「大正解！！」

「プール……」

二人はあきれた顔をして、お互いの顔を見合わせる。

「なあ、プールはもうちょっと先だろ」

「ああ、まだ4月なんだし」

「だって俺、濡れるの好きなんだ！ああ楽しい！」

龍山はそう言うのと、別の生徒に同様のことを話すべく、二人のもとを去っていく。二人はしばらく黙っていたが、やがて前田が口を開く。

「あきれたな……、このクラスには変人がたくさんいるんだな」
「うん」

零時もそう返し、教室の隅で大きなかばんの中から水着をあさっている八月一日をちらと見る。

「変人が二人だけであることを祈るしかないな」

零時がそう言ってため息をつく、前田も苦笑する。

「羽生も几帳面すぎで変人レベルじゃないか？」

「ああ、それも確かに」

零時は、くすつと笑う。

第07話 抗議と変人（後書き）

）To be continued!!

第08話 首吊り死体と長谷川

「死ぬことは、とてもいいことなのよ」

一人の少女が、一人の少女に言う。ここは夜の校庭。花びらと葉っぱが半分になっていいるソメイヨシノの桜の木の下に、首吊りの縄と踏み台が置かれている。赤木^{あかき}売生子^{あいき}は、糸色^{いとしき}己美^{きみ}に自殺をそそのかしている。その隣には、朝風^{あさゆ}まきもいる。

「で、でも、確かにこの世には未練はないけど、」

糸色がためらいながら言う、朝風はボンと糸色の背中を叩いた。「人が首吊っている姿は、とっても情熱的なよ！わかる？わたしはね、ずっと首吊り死体を生で見て肌で触るのにあこがれているのよ！」

感動したような目つきで朝風はいい、それに乗って赤木も言う。

「人の死を仲介したら、私も、あ、あこがれの天使に……！」

「とりあえず、私が死ねば喜ばれるんですね？」

糸色が言うと、二人の少女は同時にごくんとうなずいた。

その次の日の朝。28日の月曜日のことである。いつも通り朝一番、午前7時きっかりに学校の門をくぐったその少女は、校庭に生えている十数本の木のうち、一本の木の枝に何かが吊られているのに気づいた。羽生はそれを一瞬見たとき、そこにあるものが信じられなかったが、それがそれでなければならないと分かった時、羽生は悲鳴を上げた。

「いやああああああああっ……！」

羽生は走って、首を吊っている人の前へ向かった。

「糸色さん……！」

糸色が、自分のクラスメートが、自分の目の前の木で首を吊っているのである。こんなありえないことがあるのだろうか。

「糸色さん……！」

羽生は、その首吊り死体を思いつき揺さぶった。

「…ん？」

糸色がゆっくりと眼を開く。

「何？」

いきなり糸色にこう問われ、羽生は安堵の息を漏らす。

「なあんだ、死んでなかったんだ…。」

羽生はほっとした表情を顔に浮かべ、そしてその一瞬後、この現象が如何に不自然で不気味なものかに気づいた。

「いやああああああ！！何で生きているの！？幽霊よ、幽霊！」
「呼びましたか？」

いきなり後ろから声がし、羽生は振り向く。しかしそこには誰もいない。オカルトが嫌いで怖い羽生の絶句は限界に達した。

「生田君ですよ」

羽生に続いて校庭に入った少女、朝風が羽生に声をかける。

「なあんだ、5番の生田君…ってええっ!？」

羽生は白くなった。

「な、何で、幽霊がクラスメートに…!？」

「あっ、三人ともおはようございます」

再度後ろから声がし、羽生はこれまだ幽霊かとついに泡をふき倒れた。

「あっ、羽生さん、寝てしまいましたか」

「ちょっと違うと思います」

神田先生の問いに朝風が応じた。神田先生はしばらく気絶している羽生を見ていたが、ふと前を向く。

「…ん？あんなところで首を吊っている人が…ってええっ!？」

神田先生は真っ青になる。

「た、助けないと!」

「大丈夫ですよ」

じたばた首を吊っている人の方へ向かおうとする神田先生を、朝風は制した。

糸色はびっくりし、それから自分の首を吊っている縄を解き、地面に降り立つ。

「おはようございます。ええと、着替えて準備してからまだ来ますね」

糸色は一礼し、首吊りの縄を持ってその場から去った。

「本当にうちのクラスには、いろいろな人がいますね」

神田先生が糸色の後ろ姿を見ながらそう言い、朝風もうなずく。

「おはよう」

長谷川がそう言いながら神田先生の横を通り抜ける。

「あっ、長谷川さん、おはようございます！」

神田先生がそのほうを振り向き、挨拶を返す。神田先生は一つ気づいたように、長谷川に言う。

「そういえば、長谷川さん、先週の歯科検診、休んでいましたね。」

今日は欠席した人の再検診の日ですから」

「はい？」

長谷川は一瞬真っ青になったが、とたんに冷静を表情に取り戻す。

「わたし、家に忘れ物をしましたので」

そう言いながら長谷川は、そそくさと去ろうとする。

「待ちなさい。」

いつの間にか起き上がっていた羽生が長谷川の肩をつかむ。

「一度学校に来てしまった以上、病気以外の如何なる事情があっても、その日の課程を終わらせるまで家に帰ることは許されません。」

「で、でも、さっきの糸色さんは？」

長谷川が反論するが、羽生は黙って首を横に振る。

「ここで寝ているからいいの。」

「遅刻は8時から」

「ともかく、あなたは如何なる事情があっても、今日あたしの許しなくで帰ることは許されません。」

「うええっ!？」

「あ、あの、あと1時間の間なら十分な準備ができると思いませんか

？」

神田先生が横から羽生に声をかけるが、羽生は厳しい口調で神田先生に言う。

「この人は、小学１年生の時から付き合っていますが、今までに忘れ物をしたことは一度もありません！」

「でも、猿も木から落ちるといいますし、」

「いけません、先生……。長谷川さんは、小学１年生の時からずっと、歯科検診の日は必ず休むんです。」

「はい？」

神田先生は長谷川の方を向き、言う。

「なにか……。事情があるのですか？虫歯がはなはだしいとか？それならば、むしろ見てもらうべきです。僕みたいな素人が分かる問題でしたら、それは大変なことですよ！とりあえず、口を開けてください」

神田先生が言うが、長谷川は顔を横に振る。

「何で歯科検診に行けないんですか？」

「ほっといってください」

長谷川はそっぽを向きながら言うが、それと同時にぱちっという光とシャッター音がした。

「玲子ちゃんのお口の中、しかと撮影させていただきました！」

カメラを持っているのは、少年だった。

「あっ、先生、ついてはおはようございます」

少年が一礼すると、神田先生は問う。

「どなたでしたっけ？」

「先生！」

羽生が横から神田先生に怒鳴る。

「生徒の名前は全部覚えてください！」

「い、いや、でも、読者が分からないので、」

「読者サービスもいい加減にしてください！」

「僕に暴力を振るあなたこそ読者サービスじゃないんですか？」

神田先生は反論するが、羽生は例のあの眼をする。

「わあ、嘘です、嘘です！」

「とにかく、6番の伊口君です」

「伊口君ですか」

神田先生がそう言うのと、長谷川が伊口に飛びつくのと、ほぼ同時であった。

「写真を返せ！カメラごとよこせ！」

長谷川が伊口の襟をつかむが、

「ちっちゃっ！世の中そんなに甘くないもんね！」

伊口はそう言い、カメラを手で固く握って死守する。長谷川はその手を何とか解こうとする。

「そういえば、いつもより口数が多いね、長谷川さん。」

羽生が言う。

「友達ですか？」

神田先生が尋ねるが、羽生は続ける。

「いいえ、友達ってもんじゃありませんよ。彼女は無口で…、ある意味そして強いです。」

羽生はそう言い、黙って児童玄関へ向かう。

「羽生さ…！」

神田先生は羽生を呼ぶのをやめた。そして再び伊口と長谷川の喧嘩を眺める。

「朝風、赤木、手伝って！」

伊口が明るい声で言うと、赤木と朝風は長谷川の体を差し押さえた。

「へへ、インスタントカメラでよかった！」

伊口は明るい声で、二人の少女に差し押さえられてじたばたしている長谷川の目の前で、カメラから出た写真を常温に慣らしている。

「〜ん、こ、これは…！？」

伊口はぴたっと静止して動かなくなった。

「返せ！」

長谷川が、自らを差し押さえる二人の少女をおしのけて、伊口を襲う。伊口の手から写真を奪い、それをびりりっと細かく破り捨てる。

「誰にも言うなよ」

長谷川は伊口の鼻を思いっきり押す。

「ひい！は、はい！」

伊口は真っ青になってうなずく。

「や、やっぱり、家に帰してください！」

伊口は真っ青になりながら神田先生に懇願する。

「ええと、今まで歯科検診をしたことがないなら……」

神田先生が拒否するが、伊口は土下座をする。

「お願いだ！帰してくれ！長谷川は実は青のり好きだなんて誰にも言わない！神に誓って！」

土下座をしている伊口の後ろから殺気がする。

「そっちかい！」

長谷川は伊口の頭をぶん殴る。

「殺してやる！」

涙を何滴か流して、長谷川は伊口を対象に殺りくを始めた。

「ええと、歯科検診の件ですか……」

神田先生が尋ねるが、長谷川はぶいと言った。

「いないとだけ伝えてください」

「は、はあ……、分かりました」

「えっ？」

長谷川は神田先生の方を振り向く。

「いいんですよ、虫歯たらげなら」

神田先生の追伸に、長谷川は再度肩をかつくりと落とす。

「やっぱりお前も殺してやる！」

長谷川に襟をつかまれ、神田先生は、羽生ほどではないが強烈なオーラを感じた。

「や、やっぱり、長谷川さんは羽生さんの親友でいいです！いいで

す！
」

神田先生が言うが、彼は死の危機に瀕していた。

第08話 首吊り死体と長谷川（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

＊次話からは、旧「神田先生」の第07話「ヴァンパイアの逃亡」を複数話に引き伸ばしたものとなります。

第09話 全ては歯科検診のために

「みなさんおはようございます。では、出席を取ります。」

神田先生は教壇に立ち、生徒達に言う。神田先生は生徒達全員の名を呼ぶ。

「今日も生田君は欠席…、生田君を除いてクラスの全員が来ていますね。では、今日の予定は、歯科再検診です。この前歯科検診を休んだのは生田君と長谷川さんでしたが、生田君については今日も休みですので、長谷川さん一人だけになります。」

神田先生はそう言い、長谷川の顔を見る。長谷川の顔は、すごく恐ろしい顔になっていた。

「ひい！」

神田先生は声にもならない声でうめいた。

「さっき、歯科検診は勘弁してくれと言ったはずですね」

長谷川は、怒りに満ちた声で言った。

「ひい！だから！」

神田先生は真っ青になる。

「医者にも何度も頼んだのですが、所詮はわがままだと言われてしまっています…」

「……とにかく私は行きません」

「ええと、歯科再検診は4時間目ですね」

「人の話を聞いてください」

長谷川が激しく立ち上がって怒鳴るが、神田先生は続ける。

「ちなみに4時間目は僕の担当、国語です」

職員室に戻った神田先生を呼んだのは、教頭先生であった。自分の机に座った神田先生の横に立っていた。

「神田先生、ちょっといいですか」

「はい、何でしょう」

神田先生は立ち上がり、自分より背の高い教頭先生を見上げる。

その教頭先生、辻見田^{とみたわかし}天子は言った。

「あなたのクラスの生徒の長谷川玲子さんについてですが」

「はい」

「先ほど出身の小学校から連絡がありました。が、小学1年生からずっと歯科検診の日は予備日も含めてことごとく欠席していたらしいです」

「はあ……」

「そこで、です」

辻見田先生は、視線の高さを神田先生に合わせるべくしゃがむ。

「他の先生とも相談して、今日登校してきている長谷川さんを強制的に歯科検診に出してもらうべく、いろいろな策を講じました」

「例えば、何ですか」

神田先生が尋ねると、辻見田先生はくすつと笑う。

「実は、歯科検診は4時間目ではなく最初から2時間目の終わりころの予定です。全校生徒には悪いですが、2時間目の授業中に校内放送で『都合により突然変更』として流すつもりです」

「だ…大胆ですね」

神田先生は半ばあきれていた。辻見田先生はさらに続ける。

「それから、万が一長谷川さんが逃亡した場合を想定して、2時間目に手の空いている先生を、この学校の教室の窓を除く全ての一階出口に配備しておき、さらに階段にも配備しています」

「そこまでしなければいけないのでしょうか」

神田先生が口を挟むと、辻見田先生は脇に持っていた一枚の書類を神田先生に見せる。

「小学1年生のときからずっと歯科検診は受けていず、さらに出身校の説明によると、4年生のときに検診の先生の都合で突然予備日が変更になったとき長谷川さんは当然登校していましたが、歯科検診の時間の少し前に早退していたらしいのです」

「な……」

神田先生は、目上ではあるものの思わず口を開けずにはいられなかった。辻見田先生はさらに続ける。

「さらに、小学6年生のとき、検診の先生に頼んで長谷川さんの家まで行ってもらいました……」

神田先生は、ごくんとつばを飲み込む。

「門前払いをされました」

「……………」

「もう、十分ですね」

辻見田先生は、立ち上がる。そして、力強く言う。

「これは、小学校からの要請でもあります。長谷川玲子さんには、何が何でも必ず歯科検診を受けていただきます」

チャイムが鳴る。1時間目の社会の終了合図である。それを聞くなり、長谷川は立ち上がり教室を出ようとする。

「どこに行くの？」

羽生が長谷川を後ろから呼び止める。

「トイレへ」

「嘘よ。」

「嘘じゃない！」

長谷川は弁論するが、羽生はぐいと長谷川の腕をつかむ。

「一緒にトイレへ行こう。」

「……分かった」

長谷川は少々いらったとした声をしていた。その時、東先生が教室へ入ってくる。あずま

「ちょっと、羽生さんかな？」

「はい、そうですけど。」

羽生はそう答え、長谷川をちらと見る。東先生は続ける。

「悪いけど、2時間目が終わった後、ちょっと職員室へ来てくれな
いかな？」

「分かりました。」

羽生がうなずくと東先生はそのまま教室を出て行く。

「じゃ、行こう。」

羽生が朗らかに長谷川の手を引っ張る。

「う……うん」

長谷川も、羽生についていく。

「ずいぶん短かったわね」

長谷川が個室から出てくると、個室の前で待っていた羽生はそう言う。

「20秒くらい？女の子のトイレはこんなに短かったっけ？」

「大きなお世話」

長谷川はそれだけ答え、黙ってお手洗いへ行く。羽生はその隙に長谷川の入っていた個室の便器へ近づく。おしっここの匂いがしない。「やはり。」

逃げようとしていたのね。羽生は小さくそうつぶやくと、個室のドアを閉め、お手洗いへ行く。

「負の数同士の計算について理解できましたか？」

2時間目の数学が始まってから30分は経ったのだろうか。教壇に立っているのは足座先生^{あだ}。

「それでは、教科書9ページの例題3をやってみましょう」

足座先生がそう言うのと同時に、チャイムが鳴る。

”緊急連絡です。今日の歯科検診は4時間目となっていました。まずは1年い検診の先生の都合で今すぐ始めることになりました。まずは1年い組より保健室へ”

「おっと……、残念ですね、数学が縮みそうだ」

足座先生は残念そうに数学の教科書に視線を落とす——ふりをして、長谷川の席を見ていた。長谷川はあせた顔をしているようであったが、それは顔以外には表れていなかった。

「先生」

長谷川が席を立つ。

「何ですか？」

足座先生が尋ねると、長谷川は真っ青な顔で答える。

「気分が悪いので：早退してかまいませんか？」

それとほぼ同時に、教室のドアが開く。顔を出したのは大田先生。おおた
「すみません、足座先生、1年い組は理科で化学反応の実験の最中、
る組は小テストの最中の理由で歯科検診を後にまわすことになりましたが、は組は大丈夫ですか？」

「はい、今教科書の例題を解いてもらっているのですが、例題くらいなら大丈夫かと」

足座先生がそう答えると、大田先生は「それでは今すぐお願いしますね」とだけ言って教室のドアを閉めて去っていった。

「……それでは、気分が悪いようですので、歯科の先生には寛恕してもらって、長谷川さんを最初に回してもらえよう頼みますね」

足座先生がにこっと言うが、長谷川は首を横に振る。

「い……嫌です」

「何が嫌なのですか？」

足座先生は教壇を降り、長谷川のほうへ歩み寄る。その途中教室のドアが再び開く。

「すみません、今すぐお願いできないでしょうか？」

大田先生の催促であった。

「ああ、すみません」

足座先生はそう言い、教室を見回す。

「出席番号順に廊下に並んで保健室に行ってください」

足座先生はそれを言ってから、長谷川を見る。

「さあ、一緒に廊下に行きなさい」

しかし、長谷川は首を横に振る。

「気分が悪いでしょう？ さっさと済ませておきましょう」

足座先生はそれだけ言い、長谷川の手を強引に引っ張る。しかし

長谷川のほうも筋金入りと見えて、その手を強く引っ張って離すと、強い声で足座先生に怒鳴る。

「嫌といったら、嫌です！」

そう怒鳴った後、全てが廊下に集まって誰もいない教室の、自分の近くの机の上に飛び乗って、机と机の上を走って、そのままそこに開いていた窓から飛び降り、廊下に出る。追いかけて廊下へ出た足座先生は、そして自分とは反対側の方向へ駆けていく長谷川を視認することはできたが、生徒たちの人ごみで少なくとも数秒のロスを強いられるであろう状態、そうして自分には今すぐ生徒たちを保健室に引率しなければいけない立場、大田先生は別の教室へ見回りに行っていて引率を頼める先生は近くにいない状態。

「ついてきてください」

足座先生は即座に、生徒たちに号令をかける。長谷川よりもこちらの引率を優先したのである。しかし、足座先生の顔は焦っていき、むしろ余裕さえ見えていた。

第09話 全ては歯科検診のために（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

第10話 玲子を捕獲せよ

長谷川は、そのまま走り続けた。この際、手ぶらで帰るより他にない。歯科検診を受けないなら。

一階へ。長谷川は、階段のほうへ走り続ける。

「大丈夫です」

職員室では、教頭である辻見田先生が、学校のあちこちにある防犯用の監視カメラを切り替える。西川先生の机の上のパソコン画面には、1階階段の踊り場が移っていた。パソコン画面を覗き込む神田先生に、席に座っている西川先生は補足する。

「ここからは見えませんが、1階へ通する階段の入口に四月一日先生を配備しています」
わたぬき

「西川先生、ご協力ありがとうございます」

教頭先生が軽く一礼すると、西川先生は立っている教頭先生を見上げる。

「中学生にもなって歯科検診を拒否するわがままは、我ら一ノ谷中学校教諭達が許さない！そして私は一度この校長を務めたことがありますしね……！」

長谷川は、走っていた。とにかく走っていた。校舎から出るべく走っていた。しかし校舎は広い。なにせ、1学年がい組からと組まで計7組、HR教室だけでも合計21教室。補足するなら、1つのクラスの生徒は約30人、この学校の総生徒は630人を超えるのである。それだけならまだしも、理科室が計6つあり、家庭科室が計3つあるなど、実に大きな中学校なのである。とにかく広い。なのに通常の中学校と同じく4階建てで、端から端まで、半端ではない長さなのである。それでもついに階段の前へたどりついたと思うや否や。

「……！」

長谷川は一瞬びっくりした。目の前に、四月一日先生が立ちはだかっていたのである。

「待っていましたよ……、では、そろそろ歯科検診をおとなしく受けてもらいましょうか」

四月一日先生が言うが、長谷川は顔を真っ青にする。

「拒否！」

そう怒鳴り、四月一日先生の横を通り抜けようとするが、四月一日先生は手際よくそこへ寄る。長谷川がどっちへ行こうとしても、四月一日先生は長谷川が通り抜ける前にそこを守るのである。長谷川はやむなく、脇から一本の、ペンくらいの長さの棒を取り出す。

「四月一日先生……、悪いですが」

長谷川は、その棒——……、杖を四月一日先生に向ける。

「それは何ですか？」

四月一日先生は落ち着き払った声でそう言う。長谷川は小さくため息をつくと、短く唱える。

「スリープ」

授業中だったこともあり、廊下には誰もいない。廊下に出ている生徒達が騒ぎ出さぬように先生たちがした配慮が、かえって仇となった。こうして、長谷川は落ち着いて使うことができるのである。

——・魔法を。

「四月一日先生、今頃長谷川さんを捕まえているはずですね！」

神田先生は、そう言った。西川先生と、お互いの顔を見ながら微笑む。西川先生は、パソコンのビデオ、階段の踊り場を指差す。

「この画面に長谷川さんが映っていないければ、我々の勝ちです」
西川先生がやや興奮気味に言う。

「……………えっ!?!」

そのムードは一気にして白けた。なんと、そこには、一人だけで階段を下りている長谷川が映っていたのである。

「な……」

西川先生は思わず立ち上がる。

「護衛術に長けている四月一日先生を突破するとは」
教頭先生も、目を丸くしていた。

一方の長谷川は、玄関を探していた。玄関から外へ出ようという
魂胆であるのだが……。

一方、こっちも玄関に備え付けのカメラを映していた。今度は内
部の、田中先生の立っている場所もはっきり中央に映っているの
である。

「長谷川さんは、なかなかの凄腕なのか、それともただの幸運なの
か、それをこれから見るができます……！」

そう言う西川先生の額は、汗ばんでいた。同時に、チャイムが鳴
る。

「2時間目、終了ね」

教頭先生が言う。

ほぼ同時に、歯科検診を終えた1年は組の生徒たちが教室に戻る。

「この例題が今日中にできなかったのは残念ですが、残りは宿題で」

「え〜」と言う生徒たちを横に、足座先生は教科書とファイルを
持ってささっと教室から出て行ってしまった。

「もう……」

今日の日番、大馬馬子おおばうまこは、黒板を消しながらため息をついた。

「……ん？」

大馬は、教室の真ん中に生徒たちが集まっているのを見て、黒板
消しもそこそこにその集まりの中心を覗く。

「ハッキング、成功」

柳生きりゅうが、机に座って、パソコンをしていた。

「な……」

ハッキングと言うその異常な単語に、大馬は声を出さずにはいら
れなかった。

「冗談？」

大馬が隣の蛍崎ほたるぎきに尋ねると、蛍崎はやや興奮気味に言った。

「すけえ…本物だよ、これで捕獲完了とか言えばもっとかっこいいのに」

「な……」

大馬は、思わず柳生のパソコンをぱたんと閉じずにはいられなかった。

「何をする」

柳生がパソコンを開き、両隣の人が大馬の腕をつかむ。

「何やってるの、ハッキングは犯罪でしょ！」

大馬がわめくが、左腕を掴んでいる前後まじりは平然と言う。

「そんな、某ドラマの最後のデロップみたいなこと言わないで、ファル○ンみたく長い目で見守ってやれないの？」

「そんなことを平然と言うな！」

大馬が怒鳴る。それと同時に、羽生は後ろから前後の肩をぽんと叩く。

「ドラマを見てそれに感化されるのもいいこと……、でもいけないのは、それによって善悪の区別ができなくなること。」

羽生はそう言って前後の足を蹴ると、柳生のほうへ向かう。

「柳生君。」

羽生が言うと、柳生は羽生を見上げる。

「どこをハッキングしているの。」

羽生が恐ろしい顔で柳生を見下ろす。

「……この学校のサーバー」

「何ですと。今すぐやめなさい！」

「やた」

柳生はあっさりそう答えると、さらにパソコンのキーボードを叩く。

「出た」

柳生がそう言うと、周りの生徒たちはパソコンの画面に注目する。

画面には、コマンドプロンプトみたいな画面の上に新しいウィンドウ、メディアプレイヤー……、ビデオ映像が映っていた。

「これは……？」

一人が尋ねると、柳生はコマンドプロンプトでいろいろコマンドを入力して結果を見てから言った。

「この学校の玄関前のカメラに映っている映像」

「やめなさい！」

羽生が大きな声で怒鳴ると同時に、柳生はちょっと強めの声で言う。

「こ…これは……、長谷川さん？」

そこには、田中先生と、田中先生と向かい合っている長谷川の姿があった。

「羽生さん、来ませんね」

教頭先生がそう言うのと同時に、足座先生が職員室へ入ってくる。

「ああ、足座先生、2時間目は1年は組の担当でしたね」

教頭先生が声をかけると、足座先生は答える。

「はい」

「授業は終わっていますか？」

「はい」

足座先生はあっさりとそう答え、自分の机へ歩いていく。

「羽生さんは、もうすぐ来ます」

教頭先生が言うのと、神田先生は教頭先生に尋ねる。

「羽生さんが、なぜ必要なのですか？」

パソコン画面を注視していた西川先生が、神田先生を見ずに画面を見ながら言う。

「羽生かおるさんが長谷川玲子さんと深い付き合いであることは知っていますね？」

「そうだったんですか」

神田先生が答えると、西川先生はくすつと笑う。

「羽生さんに、長谷川さんを説得してもらうのです」

「そこまでするんですか」

神田先生が半ばあきれた声で言うと、教頭先生が続きを言う。

「長谷川さんは小学校のとき、歯科検診を一切受けませんでした。

おそらく捕まった後もしぶとく抵抗すると思います。そこを、説得させるのですよ」

「生徒を利用するのは教師としてやや問題なのは」

神田先生が口を挟むが、教頭先生は首を横に振る。

「むしろ、いいことです。学校では、問題を基本的に生徒たち同士で解決してもらうために努力しているのです。そうしないと、大人になっても生徒たちは自立することができませんからね。生徒たちのいさかいに先生が介入するのはやむをえない時のみと、この学校の方針で定められているのです」

第10話 玲子を捕獲せよ（後書き）

）To be continued！！

第11話 ハッキングと爆発と田中先生

「今気づいたけど」

赤木が、パソコンをいじっている柳生の後ろから話しかける。

「今日って、歯科検診の予備日だったけ？」

「うん」

柳生は生返事をする。

「なら、なぜクラス全員で行ってるの？」

「小説だから」

柳生は生返事をする。

「そんな答え、許されないわよ！」

大馬が柳生に怒鳴る。

「責任者はお前だ」

「……………」

「羽生さん、来ませんね」

教頭先生が困った顔をしてそう言うと、西川先生もうなずく。神田先生は、羽生の利用にあまり乗り気ではなかったのだが、無意識にうなずいてしまう。

「はぁ……、始まっちゃいますよ」

西川先生が、パソコンの画面を見ながらうなずく。

「……………ん？」

西川先生は、パソコンにぐっと顔を近づける。手では何度もキーボードを叩いていたのだが、ようやく顔を遠ざけて、叫んだ。

「ハッキングされているのかもしれない」

「えっ？」

教頭先生は、西川先生の思いかけない一言にびくつとする。

「一度シャットダウンします」

西川先生はそう言い、メディアプレイヤーを閉じる。

「ばれたか」

教室でパソコンをいじっている柳生は、そう舌打ちをする。

「何がばれたの？」

朝風が聞くと、柳生はキーボードを叩き、パソコン画面を見ながら返す。

「ハッキング先のパソコンがメディアプレイヤーを終了した」

「ええっ？」

朝風がどきりとする。

「でも、大丈夫」

柳生は、キーボードをさらに叩く。

「スタートメニューからシャットダウンできないように、レジストリを書き換える。間に合えばいいけど」

一方、児童玄関の前では、長谷川と田中先生がにらみ合っていた。

「やあ……、先生、初めまして」

「こちらこそ初めまして。技術家庭の田中です」

そう言いながらも、田中先生は退る。どうやって？どうやって、あの四月一日先生を抜いた？田中先生はそのことを考えないことはできなかった。かといって、目の前の長谷川を逃がすことはできない。何としても……、校門という後があるとはいえ、必ず自分で止めなければいけないという思いに駆られた。

長谷川は、やむを得ずとした顔をしてはあっと一呼吸すると、田中先生に飛びかかる。

「！！」

田中先生はしまったと思い早足で退ろうとするが、そのときはもう遅かった——。。。

「くそっ！」

職員室で、パソコンをいじっていた西川先生が勢いよく立ち上が

る。

「レジストリの設定を書き換えやかかった!」

西川先生はスタートメニューの「ファイルを指定して実行」からレジストリエディタを起動すると、手際よくレジストリキーのフォルダを開いていく。

「!!!」

レジストリエディタが突然閉じた。そればかりではなく、マウスポインタが勝手に動く。自分のマウスを動かしても、それにはびた一つの反応を示さず、勝手に動いていきメディアプレイヤーを起動する。

「どうしたんですか?」

横の神田先生が尋ねるのを、教頭先生が制止する。

「西川先生はああなると、誰が呼んでも聞きませんから」

「そ……そうなんですか」

神田先生はそう言い、教頭先生を見る。その瞬間。

どっかーん。

上のほうから、大きな爆音が響いた。

「あれは……、何事です!?!」

教頭先生が上の天井を向く。神田先生も思わず、上を向く。

「何があったの?」

教室でも、柳生を除く生徒総員が上を向いていた。

「理科の実験で失敗したの?」

有葉たやくがそう言うと、羽生はそれを否定する。

「なら、真上からは聞こえないでしょう。教室の中での爆発?」

「よし」

パソコンをいじっている柳生が声をあげる。自分のパソコン画面に、再びメディアプレイヤーが現れる。

「ん?」

柳生は、その画面に、玄関前に、眠っているように倒れている田

中先生を見つける。そして……、そこにはもう長谷川の姿は無かったのである。

「みんな！」

柳生が言うが、周囲は上のことで夢中であつた。3時間目開始を告げるチャイムが鳴っていたが、それはもうみんなの耳には届かなかつた。

その10分程度前。

2時間目の授業が終わつた2年は組の館野明日子^{たてみあすこ}は、廊下の端に一本のペンくらいの長さの棒が落ちてゐるのに気づいた。

「ごみかしら」

館野はそれを拾い上げるが、それを持つだけでなんとなく不思議な感じがしたので、教室に入つても捨てるに捨てられず、やむを得ず手に持っていた。

「3時間目は英語ね」

館野が机に座ると、隣の席の蓮寺^{はすてら}めいが館野に話しかける。

「うん」

「わたし、英語苦手ー」

館野はそう言つて、その棒を持っている左手を下ろし、頭を横向きに机の上に乗せ、右手で机の上の英語の教科書をばらめくる。棒は、持っているだけで不思議な感じがしたので、この違和感を味わっていたかつたというか、そのあたりの感覚はともこの小説を書いている僕の感性では表せないので割愛させていただく。

「なんで日本人なのに英語を勉強しなければいけないのかなー」

館野がぼそりと言うと、蓮寺が明るい声で言う。

「英語を知っておけば、将来の仕事などで外国に行かなければいけないときに役立つでしょ」

「でも、今学校で習っている単語ってほとんど役に立たないんですよ。むしろ役に立つのは1年生で習ったことくらいって感じ」

館野ははあっとため息をつき、教科書の中の単語からてきとうな

ものを選ぶ。

「イクスプロージョンとか」

どっかーんと、手に持っていた棒――・・・、杖から大きな爆音が響く。爆発自体は小規模であったものの、それでも館野の机の脚を消すには十分であった。折れた脚とともに、館野は爆音を非常に近くから聞いてしまったためか、そのまま意識を失って、机に頭を乗せていたこともあり、椅子から横へ落下する。

「アス……アス!!」

蓮寺が思わず立ち上がるが、館野は返事をせず、眠ったような顔をしていた。それと同時に、3時間目開始のチャイムが鳴る。2年は組の生徒たちは、ざわつとしていた。隣の組から、生徒達が集まってくる。

「何があったの？」

「大丈夫？」

2年は組の教室は、一時騒然となった。

「こういう次第で」

2年は組担任の管原公一は、職員室で教頭先生に平謝りする。

「とりあえず、救急車を呼びました」

「それは適切な判断です」

教頭先生が返す言葉といえば、これしかなかった。

「とりあえず、2年は組の生徒たちは全員帰らしてください。他の組については、私が判断します」

教頭先生がそう言うのと、管原先生は申し訳なさそうに何度もべこりべこりと頭を下げる。

「それで、その」

隣の西川先生が教頭先生に話しかける。

「長谷川さんのほうはどうでしょうか？」

「え？」

教頭先生はそう言い、西川先生のパソコンのほうを見る。

「長谷川さんがいなくなって、代わりに田中先生が倒れています」
パソコン画面を覗いている神田先生が、そう言う。

「な……」

教頭先生は思わず、西川先生のパソコンのほうへ走り、画面を見る。

「田中先生…田中先生!!」

「もうすぐ校内放送があるはずよ。」

羽生がそう言って自分の席に戻ると、半分程度の生徒がみな自分の席に戻る。もう半分は、柳生のパソコンの周りに残っていた。

「田中先生が、倒れている」

柳生のパソコンに映っていたのは、児童玄関の前で横向きに倒れている白衣の田中先生の姿であった——。。。

校門の前で待ち伏せをしていた西島先生は、校舎3階の爆発に、思わず校門を離れていた。校舎に気を取られていた西島先生の眼中には、もはやすれ違って校門から出て行く長谷川の姿は無かった。

教頭先生は、放送室で、用意していた文書を読み上げる。その文書は速筆でよほどのことが無い限り読めないほどの代物だったが、教頭先生はそれを軽やかに読み上げる。

『2年は組の教室で爆発がありました。原因は不明ですが、警察と消防車を呼んでいます。今日の3時間目以降の授業は中止します。生徒たちは総員、それぞれのクラスの担任の先生の指示に従って、集団下校してください。繰り返します。2年は組の教室で爆発がありました——。。』

第11話 ハッキングと爆発と田中先生（後書き）

ト be continued!!

FC2小説でも「神田先生」を公開しています。

第12話 連れ去られた是

神田先生は、教室の教壇に立って、生徒たちを見ていた。

「2年は組で小さな爆発事故が起きたので、安全のため生徒たちは今すぐ一斉下校するとのことです」

神田先生はそう言い、教壇の上の出席簿を開く。

「ひとまず全員いるか確認します。糸色さん」

「はい」

「公孫田さん」

「はい」

「犬神さん」

「はい」

「一条君」

「はい」

「生田君……休みですね。伊口君」

「はい」

「呂麻男さん」

「はい」

「白黒君」

「はい」

「花田君」

「はあい」

神田先生はその次の人の名前に気づく。

「あっ……」

思わず声を上げてしまう。

「……長谷川さん。……いませんね」

この騒ぎですっかり忘れていた。そういえば、長谷川さんはどうなったのだろうか。

「長谷川さんなら、学校を出て行きましたよ」

後ろのほうの席に座っている柳生きりゅうが手を上げながら言った。机の上にはパソコン。

「学校にはパソコン持ち込み禁止ですよ？」

神田先生が注意するが、柳生は聞かない。

「それより長谷川さんが通った後に、田中先生が倒れていましたが」
「聞きました」

「そして、その画像を詳細に分析すると、喉に2つの……」

「もういいです」

神田先生は呆れ声でそう言った。

「最後まで聞いてください」

そう言う柳生を無視して、神田先生は出席確認を続ける。

「羽生さん」

「はい。」

「火厘さん」

「はい」

「……ん？」

救急車の中で、ばかりと目が覚める。

「館野さん、大丈夫ですか？」

救急隊員が話しかけるが、目が覚めた館野は、じっと天井を見上げる。

「ここはどこですか？」

「救急車の中です」

救急隊員がそう答えるが、館野はしれっとした顔をしている。

「早く答えてください」

その意外な館野さんの返事に、救急隊員は焦らず再度答える。

「救急車の中です」

その救急隊員の顔を見ていた館野は一言。

「今、何で言いましたか？」

「……………!!」

救急隊員は、別な隊員に声をかける。

「おい、館野さん、耳がいかれているかもしれない」

「何だって？」

空っぽになった教室を背に、神田先生は職員室へ戻ると、教頭先生に声をかける。

「教頭先生」

「何ですか」

職員室の前方で黒板に何かを書きながら西川先生と話していた教頭先生は、少しの間を置いて神田先生を向く。

「ちょっと出かけてきます」

神田先生が言っていると、教頭先生はにこっと言う。

「気を付けてくださいね」

「はい」

神田先生がそう言って職員室から出て行くと、西川先生は教頭先生に尋ねる。

「神田先生、どうしましたか？」

教頭先生は、静かに答える。

「担任として長谷川さんを説得しに行ったのですよ」

「長谷川さん……。」

家に戻った制服姿の羽生は、自分の部屋の窓から外を眺める。

「昔、よく遊んだよね。」

羽生はそう言って、2階である自分の部屋の窓を開けると、そこからえいっと飛び降りる。そこには、ほうきが浮いていた。その、自分の乗っているほうきを眺めながら、羽生は小さくつぶやく。

「今日も手際がいいわね、マーちゃん。」

そう言って自分の部屋の中を見る。

「マーちゃん、出てきて。」

自分のベッドの下から、みよっと黒く小さな猫が出てくる。

「ミャー……」

「安心して。誰もいないから。」

羽生が言うと、マーちゃんと呼ばれた黒猫は、みよっと駆けて来ると、部屋の窓を出て、羽生のほうきの後ろに乗る。羽生が窓を閉めると、マーちゃんはびよんと羽生の肩に乗る。そのマーちゃんを眺めながら、羽生は言う。

「久しぶりに、長谷川さんの家に行くのよ。」

羽生はそう言う。その直後、羽生のほうきは東へ向かってゆつくりと動いた。

「これを誰かに見られては」

声を発したのは、マーちゃん、黒猫の口からである。

「慎重なのね、マーちゃん。下からは視界妨害の魔法がかかっているから。」

羽生はそう言って、ほうきをもっと上空へ上げる。空を見上げながら、羽生は、独り言のようにマーちゃんに語りかける。

「実際のところ、あたしとマーちゃん以外は誰も知らないんだから。あたしと長谷川さんが、魔法使いであることを――・・。」

羽生はそう言い終わると、ほうきを長谷川の家の方へ向ける。「多少生徒○役員共的に言うと、視界妨害の魔法のおかげでパンツは見られないから。」

「是さん」

商店街を走っていた神田先生は、目の前に制服姿の是が歩いているのに気づく。

「だめじゃないですか、寄り道しちゃ」

「だって、先生」

前髪を目を隠すように鼻の先まで伸ばしている是は、背中に学校指定のかばん、そして右手にたくさんの本の入ったレジ袋、そして左手にたくさんの本の入ったレジ袋を持っていた。

「わたし、本が好きなんです」

「だからといって寄り道していい理由にはなりません」

神田先生が言うと、是は左手のレジ袋を神田先生に差し出す。

「先生も本を読んでみませんか？面白いですよ」

是の目が髪で見えないので表情は分からないのだが、多分につくりとしているのだろう。

「前髪、切ったほうがいいですよ」

神田先生が一步退るが、是は首を横に振る。

「前髪を切ったら、本が読めなくなるんです」

「それはまだどうしてですか？」

「それは……」

是はそう返事をする、ふふっと笑う。

「さあ、何ででしょう。どこそやの某氏がよそよしくしている理由を突き止めるより難しいですよ」

「だから、前髪そこまで伸ばすとかえって不気味ですから」

「それでいいんです」

是はそう言うと、くるっと回って歩き出す。

「是さん、ちょっと待ってください」

「何ですか？」

是が振り向く。

「ちゃんと前、見えるのですか？」

「見えなければ本は読めません」

「そ……それもそうですね」

神田先生が答えると、是はそのまま歩いていってしまう。

「さて、僕も行きますか」

神田先生がそう言うのとほぼ同時に、前で、是が学生服を着た大男とぶつかる。

「すみません、すみません！」

是が何度も頭を下げるのを見て、神田先生はあきれた顔をする。やっぱり切ったほうがいいですよ。学校に戻ったら電話しようか。神田先生がそう思うや否や。

「何だ、つるもうと思ったら女かよ」

大男の一言に、神田先生はどきつとする。危ない。この男、危ない。さらに、その大男の両隣に、たちの悪そうな男子学生が二人。

「すみません、すみません！」

大男がふんと鼻を鳴らす。

「さっさと消えろ」

「は……はい」

それを見て、神田先生はほっとした。それと同時に、前からいきなり強い風が吹く。

「あっ……………」

是の髪が大きくめくれる。その顔を見て大男は……………。

「前言撤回」

大男は、是の制服の襟を掴む。

「貴様……………」

一体是の顔に何があるのだろうか。神田先生はそう思いつつ、そこへ走っていき、大男に声をかける。

「やめてください！」

「何だでめえ。こいつの彼氏かよ」

そう言う大男が襟を掴んでいる是が、神田先生を見る。髪めくれた是の顔は……、とでつもなくかわかった。目元がかわいく、口の大きさが目に相応しており、まさにこの世にこれ以上のものがあるとは思えないほどのあどけなさであった。是と目が合ったので、神田先生はおもわず頬を赤らめる。

「あの……、本が読みたいんです」

是が男に言うが、男は是の顔に自分の顔を……………。

「ご、強姦です！」

神田先生が横から大声で叫ぶが、大男の隣の少年が神田先生を蹴飛ばす。地面に転がった神田先生に、蹴飛ばした少年は神田先生を見下ろして言う。

「てめえ、しつけないあ、この赤木様の耳はすごくいいんだよ」

「赤木……売生子さん？」

神田先生がそう言うと同時に、是の悲鳴が聞こえる。

「口、やわらけえなあ……」

男は、淫らかなものを見る目で、是の顔を見ていた。

「これから毎日俺の家に住んで、まいにち毎日、俺と、」

「だめです！」

神田先生が怒鳴るが、再び赤木と名乗った少年が神田先生を蹴飛ばす。

「俺は青木ってんだ、よろしくな」

大男は是にそう言うのと、ぼふっと是を背中におんぷする。

「ああ、胸おっけえなあ」

「待……」

神田先生が声を上げると、赤木は反射的に神田先生のあごを蹴り上げる。

「行こうぜ、鶺鴒^{うじ}」

赤木が、大男の隣にいる少年に声をかける。

「ああ」

鶺鴒もそう答える。

「さあ行くぜ、二人とも」

青木が言うが、是は嫌そうにじたばたしている。

「わたしの……私の本！！」

神田先生は再び立ち上がろうとするが、脚が、脚が上がらないのである。

「こ……是さん」

神田先生が是の名を叫ぶが、3人はすでに平然と遠くへ歩いていってしまう。周りの人々は、そんな神田先生を遠巻きに囲むことしかできなかった。

第12話 連れ去られた是（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

第13話 長谷川の正体

「長谷川さん。」

長谷川の家の門の前に、羽生が立っていた。羽生がチャイムを鳴らすのが、反応がない。

「居留守。」

羽生はいらったとした顔で、もう一度チャイムを鳴らそうとする。その時。

「何」

いきなり横から、長谷川の声がした。羽生は振り向くと、長谷川に怒鳴る。

「どうして、歯科検診を受けないの。」

羽生に力強くそう言われ、長谷川は少しうつむいたが、顔を上げると、羽生に言う。

「ついて来て」

長谷川は、家の門を開け、家の中へ向かっていく。長谷川の家の外見は普通の家で、門から玄関までは普通の石畳の短い道が続いていた。それがもちろん幻覚ということは、長谷川と長い付き合いである羽生は承知していた。

家に入った長谷川は、左の、書斎のほうへ向かう。家の玄関の壁は全て茶色の木で、2階吹き抜けがあり、そして右のほうに螺旋階段がある。羽生は長谷川についていく。

「久しぶりね、羽生さんが私の家に来るなんで」

長谷川はそう言うが、顔は笑っていないかった。書斎のドアを静かに開けると、長谷川は羽生を書斎の中へ招き入れる。

長谷川は、床が丸い円の形をした書斎の、中央にある木の大きな机の椅子に座ると、机の前に立った羽生に尋ねる。

「何の用」

書斎の頂上からは白日のような白い光が差している。

「だから、さっきも言ったじゃない。」

羽生は、寂しそうにそう言う。

「そう」

長谷川は、立ち上がると羽生に言う。

「例え私の口の中に何があっても、恨まないことね」

長谷川が言うと、羽生はごくんとつばを飲み込む。先ほどまで羽生をにらんでいた長谷川は、いきなりにやりとした顔をする。

「それより、お友達は大丈夫？」

「どういう意味よ。」

いきなり表情の変わった長谷川に、羽生は警戒しながら返事する。

「といっても、二年生だけどね」

長谷川は、にやっとした顔をしている。

「な…何なのよ。」

羽生は、嫌な予感を覚えた。

「その通り」

長谷川は、その羽生の心中を察したように言う。

「館野さんは、もうすぐわたしの言いなりになるのよ。……私が撒いたウィルスによってね——・・」

「このIPアドレスは」

職員室でパソコンをいじっていた西川先生が、思わず声を上げる。

「どうしましたか」

隣の席で仕事をしていた濱井先生が、西川先生に尋ねる。

「いえ……、さっき私のパソコンがハッキングされたんです」

「何ですと」

濱井先生が思わず声を上げると、西川先生は続ける。

「それで、私、先ほどまでハッキングしたパソコンのIPアドレスをなんとか割り出せないものかと思っていたら、あっさり割り出せました」

「すみません、IPアドレスとは何ですか？」

濱井先生が尋ねると、西川先生はパソコンの画面を見ながら言う。「パソコンをネットワークにつなぐとき、それぞれのパソコンに割り当てられる、いわばネットワーク上の住所みたいなものです。パソコンごとにIPアドレスは違うのですが、これは……」

西川先生はそこまで言うのと、黙ってしまふ。

「どうしましたか、もったいぶらないで教えてください」

濱井先生がどきどきしながら西川先生に尋ねると、西川先生はさも深刻なそうに言う。

「そのIPアドレスが、この学校が割り当てているものの一つなのです」

西川先生がそこまで言うのと、濱井先生だけでなく、そこにいた先生総員が思わず西川先生に視線を集める。

「つまり、誰かがこの学校のネットワークをハッキングして、私のパソコンをハッキングしたと言うことです」

職員室は一転、沈黙した。

「教頭先生」

西川先生は立ち上がると、職員室の前の、教頭先生の机を向く。

教頭先生はその机に座っていて、西川先生を驚嘆の目で見つめていた。

「生徒たちの持ち物検査をすることを提案します」

「なぜその結論になるのでしょうか」

教頭先生が尋ねると、西川先生は少し考えてから、教頭先生に力強く言う。

「なぜなら……、ハッキングした者がこの学校の生徒である可能性が濃厚だからです」

「な……」

教頭先生は、開いた口が塞がらない。西川先生は続ける。

「この学校のIPアドレスが検出されたと言うことは当然この学校のサーバーを使ってこの学校のサーバー自身の中身をハッキングしたことになるのですが、この学校のサーバーはこの職員室に一つだ

けでしかも独立していて、職員室の周りでないとLANからハッキングすることは実質不可能。職員室から離れた場所からはサーバーに繋げるLANケーブルが必要になるのですが、LANケーブルの入れ口がある場所はここではパソコン室程度。パソコン室のパソコンを全て調べれば接続履歴が明らかになるのですが、万が一のことも考えて生徒達がノートパソコンを所持していないか検査する必要があります」

「先生」

長羽先生が立ち上がる。

「神田先生から、ノートパソコンを所持している生徒が一人いると伺ったことがあります」

長羽先生の一言で、西川先生は立ち上がる。

「……………」

「それもそうですね」

教頭先生は立ち上がると、西川先生の机のほうへ行く。

「明日はみどりの日（小説内では2003年）だから、あさっての30日に全校で持ち物検査を実行しましょう」

一方ここは校長室。席に座って目の前の書類に目を通していた校長先生は、窓も何も無い前から風を感じたので、ゆっくりと顔を上げる。案の定、そこにいたのは。

「ヘファイストス」

ヘファイストスと呼ばれたその男は、瘦躯で黒いスーツを着て立っていた。縦に細長いその顔を、ぐっと校長先生に近づける。その表情は、まるで誰かに自分の要求を押し付けるかのようにずるがしこそうな顔であった。

「また要求か」

校長先生は、疲れたような声を絞り出し、手に持っていた書類を机の上に置く。

「はい」

ヘファイストスは顔を引っ込めると、校長先生の机へ一步一步近づく。

「今度は何だね」

少々の諦めを含めた顔で、校長先生は尋ねる。

「はい」

ヘファイストスは、校長先生の机のすぐ前へ立つと、言った。

「ある行事を開催して欲しいのです」

「その行事とは？」

校長先生は尋ねる。

「はい、こいのぼり大会です」

「……………趣旨は？」

ヘファイストスは、校長先生が尋ねてくると、ゆっくり言葉を選びながら話す。

「それぞれのクラスごとにこいのぼりを作っていただき、それを飾って、審査員がこいのぼりの優劣を決めるのです」

それを聞き、校長先生はぱたと立ち上がる。

「まさか中学生に、こいのぼりにたしなめと？」

「はい」

ヘファイストスは、にやにやしている。校長先生は、まだ4月と言うに顔中に汗をたらしている。

「……………で、実施日は？」

「当然のことですが、こどもの日である5月5日です」

「……………何をたくらんでいる？」

校長先生がありったけの言葉を搾り出して尋ねる。

「それは内密でございます」

ヘファイストスはいかにも紳士らしく、べこりと頭を下げる。

「もし拒否しましたら…、われらの組織はこの一ノ谷中学校の全てを破壊し、生徒たちを皆殺しにします……」

そう言うヘファイストスの顔は、不気味に笑っていた。

「……………」

校長先生はうなって、黙って、力が抜けたように椅子に座り込む。

「館野先輩があなたの言いなりになる？なぜ？」

長谷川の家で、羽生は長谷川に怒鳴る。

「ふっ……」

長谷川は吹き出す。

「簡単なことだよ。なぜなら、私はヴァンパイアなのだから……！」
「えっ。」

羽生は、どきりとする。長谷川はにやりとしながら続ける。

「そして……、田中先生の血を吸った。つまり、田中先生の挙動は、
全て……」

「や……めろ」

それを最後の声に、田中先生の凶刃により、道端で停車していた救急車の運転手はばたりと倒れこむ。田中先生は、その運転手を押しつけ、運転席に座る。田中先生は、アクセルを踏む。後ろには、運転席の後ろの白いカーテンの向こうには、全てが血と救急隊員の死体——・・。

「こちら田中一です。救急車を掌握。残念ながら館野明日子は別の救急車で運搬されているようです。このまま一ノ谷市立総合病院へ向かいます」

「……わたしが掌握している」

長谷川は、しばらく目をつぶった後、控えめな笑みを浮かべた顔で羽生に、勝ちほこった声で言う。

第13話 長谷川の正体（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

FC2小説の「神田先生」には、毎話の最後に一言コメントも書いてたりします。

第14話 商店街の変

「神田進」

神田先生の写った写真を手に、一人の、ピンクの髪を背中まで伸ばした、つんとしたピンクの瞳に小さなつるつとした鼻、そして口、小柄な体に白いカッターシャツと茶色のスカート、さらにその上に黒いマントを背中にかけている少女は、波止場の先に立っていた。

「こら、君、そこは危ないから下がちなさい」

あと一歩で波止場から落ちてしまうような、海との至近距離に、後ろに立っている、港の事務員が少女に声をかける。少女はふりむくと、脇から杖を取り出し、事務員に向ける。

「アイス・ソード」

空中に氷のみで構成された人の足くらいの大きさの剣が現れ、その剣は、そのまま事務員の胸へ突き刺さる。胸から火山の噴火するように血が吹き出る。仰向けに倒れた事務員を、その少女、ハルスは見下ろす。

「人目のつかないうちに早く見つけないと、ね……」

ハルスはそう言い、ぱちんと指を鳴らす。ハルスの目の前にほろろきが横向きで浮かんた状態でぱっと現れると、ハルスはそれにすばやくまたがり、ほうきを斜め上へ上げ、そのまま早めに進んでいく。

一方、商店街で自分の生徒を不良にさらわれた当の神田先生は、青木らの行った道を全力で駆け抜けていた。

「是さん！」

神田先生が大声で叫ぶ。目の前には、大柄な体の青木の背中に負われた是、その両脇に青木より一段か二段下の身長少年が二人いた。

「あ？何だ？」

青木は振り向き、神田先生に怒鳴る。周りの人々は、5人の周り

に大きな輪を作る。

「青木さん、是さんを返してください」

「あ？カレシかよ？」

青木は、自分より身長の高い神田先生を見下ろすように言う。

「違います……、私は是長読さんの担任の先生です」

神田先生が力強く言うのと、青木ははっはっはと笑いながら言う。

「なんだ、先公ごっこかよ。その身長で先公？笑えるな」

両隣の少年も、腹がよじれるほど笑っていた。

「違います！」

青木に背負われた是はそう怒鳴り、青木の尻を強く蹴る。是の足は、青木の尻の間に刺さって抜けなくなる。青木がはすみで是の尻を支えていた腕を放してしまうと、是はほんと背中を地面へ強く叩きつける。それでも、青木の尻に刺さった右足が抜けない。

「てめえ……、いい度胸だな、二人とも」

青木が神田先生のほうを向きながら言ったのだが、是はもうすでにその時点で冷や汗をかいていた。

「赤木、この女を気絶するまで殴りな」

「ラジャー」

赤木はそう返事すると、是を見下ろす。

「うう……」

是は、その赤木の自分を見下ろしている怖い顔を見て、顔を真っ青にする。と、突然赤木の頬を、神田先生は横から殴る。赤木がばたんと地面に倒れると、神田先生は青木を見る。

「弱いものいじめは、やめてください！」

神田先生がそう言い終わると同時に、もう一人の少年、鵜戸が後ろから神田先生の口を手でふさぎ、胸をもう片方の手で押さえつける。

「！！んんんん」

神田先生がしたばたしている間に、青木は正面から神田先生の顔を殴る。神田先生は、鼻血を出す。

「上出来だ」

青木は、はっはっはと笑いながらそう言う。

「や……やめなさい」

一人の警官が青木に声をかけるが、青木はぎろりと警官をにらむ。

「ひっ！」

警官は顔を真っ青にする。その隙に、立ち上がった赤木が、仰向けに倒れている是の顔を何度も足であしらう。是の右足はいつのまにか青木の尻から抜けていたのだが……。

鼻血を出し、目にあざまで作った神田先生の顔を、青木はさらにぼかぼかと殴る。

「俺にも殴らせろ」

鵜戸が言うとき青木はにやりとした顔をし、鵜戸から神田先生をぶん取ると、神田先生の背中を自分の胸に押し付ける。鵜戸も、神田先生の顔を何度も何度もぼかぼかと手で殴っていく。

「はっはっは、楽しいな」

鵜戸がそう言う。何度もぼかぼかと殴られた神田先生の顔は――
……。赤木に殴られている是が眠ったような顔をしているのに気づくと、神田先生は強い声で叫ぶ。

「や……やめてください！！！！！！」

その瞬間。そこに、金色の光がほとばしる。あまりのまぶしさにそこら一面の人々が総員目を閉じる。

「何でことをするの！！」

長谷川の家書齋で、長谷川の前で羽生は言う。

「そんなことより、早く先輩を助けに行かないと大変なことになるわよ？」

長谷川はにやけた顔をしている。

「……………っ。」

羽生は顔をしかめる。

「……………失礼する。」

羽生はそう言い、駆け出して書斎から出る。閉じたドアを見て、長谷川は口を大きく開けて笑う。

「は……はっはっははははははっ!!」

一ノ谷市立総合病院の入口から今まさに外へ出ようとしていた一人の大人は、目の前から白衣の男の人が向かっているのに気づいた。しかし他人のことなので、その大人は白衣の男を無視して外へ出ようとする。そんな大人の前に、白衣の男は立ちはだかる。

「な……何ですか」

大人が尋ねると、その白衣の男、田中先生は右手に隠し持っていたナイフを、ざくっと大人の腹に刺す。自分の腹に激痛を感じた大人は、ごぶっと口から血を吐き、そのまま崩れるように倒れる。その大人の胴体を蹴って、田中先生は病院のロビーに入る。ロビーは、一気にざわつとなる。不安に駆られた人々はパニックになり、受付の看護師の「落ちついてください!」という声も無視して、ロビーに一步一步足を進めてくる田中先生を、退りながら遠巻きに見ていた。田中先生は右手にナイフを持ち、そこにいる人たちに向ける。

一人、恐怖に駆られてトイレの個室に入って鍵を閉めた人がいれば、一人は中庭の茂みに隠れた。それぞれ、パニックで、兎角に田中先生の目に触れない手立てしか考えられなかった。そうして、次の瞬間、全員一気に後ろを向いて走り出す。それとは対照的にゆっくりと歩いてきている田中先生は、ちらと受付を見る。

「ひっ!」

受付にいた二人の看護師も顔を真っ青にし、受付の後ろにある事務室へ入り、ぱたんとドアを閉める。それを見て田中先生は、ナイフを持っている右手を下ろす。

「我が主人、長谷川玲子様」

田中先生は、独り言のようにつぶやく。

「作戦は順調。一ノ谷市立総合病院のロビーには誰もいません。どうぞ」

「ご苦労」

書斎の机に座っていた長谷川は、田中先生からのテレパシーを受け取る。

「そのままロビーに誰もいない状態を維持されたし」

長谷川はそう言うのとゆっくりと立ち上がり、不気味ににやけた顔で言う。

「さて……、こっちも動きますか」

「な……何？」

そう言うころには、青木の体は、強く地面へ叩きつけられていた。同様に、赤木、鵜戸の体も自然と浮かび上がり、そして地面に強く体当たりする……。――。

いつしか顔中の傷の治っていた神田先生は、自分の両手を見下ろす。

「これは……」

何がおきたか分からず、神田先生はただただ茫然としていた。

「先生」

是が、これまだ茫然とした顔で立ち上がる。先ほどまでそこ一面を覆っていた光は消えた。が、……。

「先生、今のは」

是の体中の傷も治っており、あっけに取られた顔をしていた。

「私にも……分かりません、一体何が起きたのか」

神田先生と是は茫然とした顔をして、そこに倒れている三人を見下ろしていた。

「ほ……補導します」

三人に対してそう言う警官の声も、どこかが上ずっていた。

「繰り返す。一ノ谷市立総合病院でナイフを持った男が人を刺し、今もなお病院のロビーにいるとの通報が来ている」

この放送とともに、一ノ谷署の駐車場に停まっているほぼ全ての

パトカーに乗っている警官たちは、ごくんとつばを飲み込んだり、
気を引き締めたりしている。

「不測の事態に対応し、決して犯人を逃がさぬよう、万全の姿勢を
以って事にあたっていたいただきたい」

「はい！」

先頭のパトカーの警官が返事し、そしてパトカーのアクセルを入
れる。

パトカーらが駐車場から出て行く様を署の4階の窓から見ていた
署長は、後ろの秘書からの報告を黙って聞いていた。

「パトカーはご覧の通り、出動いたしました」

「機動隊は？」

署長は後ろを振り返る。秘書は、答える。

「はい、すでに手配しております」

第14話 商店街の変（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

第15話 校長の陳謝とハルス

「今気づいたけど」

赤木が、パソコンをいじっている柳生の後ろから話しかける。

「今、たくさんのことが同時に進行しているよね？」

「うん」

柳生は生返事をする。

「でもこんなにたくさんの同時進行があつたら読者の混乱を招くよね？」

「作者本位だから」

柳生は生返事をする。

「そんな答え、許されないわよ！」

大馬が柳生に怒鳴る。

「責任者はお前だ」

「……………」

商店街で、数人の警官が青木と赤木と鵜戸の三人を連行しているのを後ろから見て、神田先生と是は呆然とした顔をしていた。

「さっきの光は……何ですか？」

神田先生が、答えは期待できないのに是に問いかける。

「わ……私に聞かないでください」

是はそう言い、「あっ」と付け加える。

「私の本」

「そういえば後ろに置きっぱなしです」

神田先生が言うのと、是はくるりと回って後ろへ走り出す。

「あ、待ってください、事情徴収があるかも……」

神田先生も、その是を追いかける。

一方、ハルスは一ノ谷銭湯の煙突の上に立っていた。

「まったく、神田進はどこにいるのかしら」

ハルスははあっとため息をつき、煙突の上から一ノ谷市の町を眺めている。

「情報によれば、一ノ谷中学校にいないとか……」

ハルスはしばらく黙っていたが、やがて手に持っていたほうきにまたがり、一ノ谷中学校へ向かう。

「みんな、本当にすまない……」

一方、その一ノ谷中学校では、職員室で校長先生が先生たちに平謝りをしていた。

「が、まだヤモリからの要求が来ました」

先生たちは、一氣にどよめく。

「静粛に」

校長先生の隣に立っている教頭先生が言う。校長先生は、さらに言葉を続ける。

「われわれは5月5日にこいのぼり大会を催さなければならない」

「……………」

先生たちは、一氣にお互いの顔を見合わせる。

「校長先生」

西川先生が挙手する。「西川先生」と、校長先生が指名すると、

西川先生は立ち上がる。

「まさか、幼稚園児のするような陳腐な催しを、中学生がやれと？」

「はい」

校長先生は、うつむきながら言った。と、別な先生が挙手しているのに気づく。西川先生もそれに気づき、席に座る。

「阿久津先生」

校長先生が指名すると、職員室の奥の方の机に座っていた阿久津先生が立ち上がる。

「ここはいつそ、無視してわれわれも全力で戦うべきです」

「そうはいきません」

校長先生は、やっとの思いで声を絞り出す。

「そんなことをしたら一ノ谷中学校の校舎が彼らによって破壊され、場合によっては生徒全員に命の危害が及ぶ可能性があります」

校長先生がそこまで言うのと、職員室はどよんとなる。阿久津先生も黙ってしまい、座ってしまふ。

「失礼します」

職員室のドアをノックする音。

「どうしますか？会議中ですが…」

教頭先生が尋ねるが、校長先生は、職員室の入口の引き戸の、白くぼやけて外のはっきり見えない窓を眺めて言う。

「あの身長は生徒ですね。まだ下校していずに、ここに留まるとはよほどの用があつてのことでしょう。入れなさい」

校長先生が言うと、ドアの近くの先生の一人が、ドアへ声をかける。

「入りなさい」

「はい」

そう言つて、その少女はドアを開ける。黒い髪に、白いカッターシャツに、茶色のスカートに……、髪の色は違い、マントはまともにないものの、それはまさしくハルスであつた。

「あれ？この学校の制服じゃ……」

ドアの近くの先生が声を上げるが、ハルスはそれを無視して校長先生に尋ねる。

「神田進はどこにいますか」

「こら、先生の名前を呼び捨てしちゃだめだろう」

校長先生が返すと、ハルスは目を点にする。

「先生……？」

「この学校の先生です」

教頭先生が捕捉し、そしてさらに続ける。

「それより、学校に私服で来ては」

「神田先生は今、どこにいるのですか？」

ハルスが尋ねる。

「あなた、見かけない顔ですね。名前は何で言うのですか？」

校長先生が尋ねるが、ハルスは強い声で尋ねる。

「神田先生は今、どこにいるのですか？」

校長先生はため息をつきながら続ける。

「その前に私の質問に答えなさい」

それを聞き、ハルスはいらつとした顔をする。

「なら、いいです」

ハルスはそう言い、ばたんとドアを閉める。

「全く」

一ノ谷中学校の屋上で、魔法で髪の色をピンク色に戻したハルスは、屋上から町全体を眺めていた。

「神田進……、一体どこにいる」

ハルスはそうつぶやく。

「こんな男を私のいいなずけにするなんて、パパも本当にアホだわ」
ハルスはそうつぶやき、屋上の端っから、外へ、床のない4階分の高さの上へ、右足を乗せる。

「無駄な抵抗はやめ、凶器を地面に落としなさい」

現場に到着した機動隊らが、揃って田中先生に銃を向ける。右手に包丁を握っていた田中先生は、人質もないのに関わらずにやりとした顔をしていた。

「10秒後に発射します。10数える間に凶器を捨ててください」
機動隊長である左古町サダモリが大きな声をかけるが、田中先生は一動たりもしない。

「10、9、8、……」

「そこまでよ、ご苦労様」

突然、病院の入口から、一人の少女が病院に入る。青髪でちょこんとした、小柄な少女、長谷川玲子であった。

「だ……誰だ！」

左古町はそう叫ぶと同時に、ガラス張りの病院の玄関の向こうから、誰一人立っていないうつぶせになっている病院の入口周辺を見た。まさかこの少女一人で？ 一体どうやって？

「総員この少女に発射せよ！」

左古町の号令と共に、機動隊総員はその少女に向かって発砲する。しまった。これは……、始末書を書かなければいけない、ど、どうしよう、つい焦って……、これでは罷免ものかな、などと左古町が冷や汗をかき終わると同時に、左古町は急に眠くなってきた。

「ああ……」

見ると、周りの機動隊員も、次々とばたばた倒れて行った。

「あ……」

薄れ行く意識の中で、左古町は、その少女、長谷川の顔を見た。

「雑魚キャラなのに名前をつけてくれただけでも光栄ね」

長谷川はそう言い、総員倒れた機動隊員の体を踏みながら歩き、田中先生のほうへ向かう。

「ご苦労、田中一。そのまま死んで」

長谷川がそう言うと、田中先生は何の抵抗もなく、ずんなりと返事をする。

「はい、ご主人様」

そう言い、田中先生は、持っている包丁を、そのまま自分の首へ――・――。

「何なんですか、ただでさえこの小説の主人公なのに出番がほとんどなくてひがんでいるときに！」

商店街。そう言う神田先生を背に、是は地面の上にばらばら落ちていた本を拾い集める。そんな是を見て、神田先生も手伝おうと、足元の本を拾おうとする。

「手伝わなくていいです！」

是が怒鳴ったので、神田先生は思わず足元へ伸ばした手を引っ込

める。と、足元の本のタイトルが見えた。

「ん……、……これ、ひ〇らしじゃないですか！」

神田先生はその本を拾い上げる。

「なぜあなたがこのような本を？」

神田先生が言う、是は恥ずかしそうにもじもじする。

「あ……あの」

是はそこまで言いかげるが、やっぱり、とつぶやき、首を大きく横にぶんぶん振って、神田先生に前からとつぐ。転んで、思わず神田先生が手放した本を、是は捕まえる。

「とにかく、二度と私に関わらないでください！」

是はそう神田先生に怒鳴ると、周りの本を拾い集める。その是に、神田先生は何も言うことはできなかった。

「すみませーん、お二人さん、ちよつと事情徴収をー」

あすこから、警官の大きな呼びかけ。

「は……はい」

神田先生は立ち上がる。

「ほら、是さんも……」

神田先生が是に声をかけるが、是は無視していた。神田先生は、そんな是を見て黙ってしまう。

田中先生の手は震えることなく、何の躊躇もなく包丁を首へ運ぶ――・・。

長谷川は、田中先生をにやにやした顔で見つめていた。と、……。

田中先生の握っていた包丁の刃が、突然粉々に碎ける。

「！！」

長谷川は、病院の入口を見る。果たして、そこに立っていた少女は。

「羽生……かおる」

第15話 校長の陳謝とハルス（後書き）

）T o b e c o n t i n u e d ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0982c/>

神田先生

2010年10月11日01時06分発行